

OB会報

創部80周年記念特集

湘南サッカーチームOB会報

第20号

湘南サッカー、創立80周年

湘南サッカーチームOB会長

27回 柳川 明信

追録版として

大正一〇年（一九二一年）、湘南中学の創立当時から校友会に蹴球部を置くことが定められていて、それから八〇年、昨

平成一三年（二〇〇一年）で我がサッカーチームも創部八〇周年を迎えたことになります。この長い歴史の中で、数多くの紅顔の少年達が蹴球（サッカー）に若い情熱をかたむけ、卒業後も母校に限りない愛着と支援を続けてきました。この気持

ちは、昭和初期の台頭からの第一期黄金時代、終戦後の全国優勝、準優勝の第二期黄金時代を築いた方々、全日本代表として活躍された名選手の方々、全国大会に出場、関東大会での活躍など脚光をあびた世代は勿論、無名に終わつた時代のメンバーも皆等しく抱いている想いではな

いでしょうか。

私は昭和二一年（一九四六年）最後の旧制中学入学で全国制覇の感激をネットやボールを繕いながら味わつた一年生でした。

*「湘南サッカー半世紀を経て」岩渕二郎追憶記念（昭和五六年一九八一年）

*「湘南サッカー実戦譜」鈴木中先生の「二八年間」（平成元年・一九八九年）が発行され、記録と各年代の想い出が残されています。そして第三号、すなわち平成元年以降の記録等を若手OB諸君が担当、作成し本号に記載しております。

今回八〇周年の記念として、昨年の総会において以下を計画しました。

*現役へのユニフォーム寄贈（平成二三年八月夏期合宿時に長袖、半袖各二式贈呈済み）

*記念行事として県下での積年の好敵手・小田原高校OBとの年代別親善試合。これは蹴球祭にて挙行。（平成一〇年には同校サッカーチーム七〇周年に我々が招待されております。）

*OB会名簿の再作成。（本会報スペシャル版と同時に発行）

*平成の一三年間を対象とする部史の第三号を編集、発行。（本紙）

これらの実施についてはOB各位に多大のご協力、ご寄付をお願いしましたことを改めてお礼申しあげます。

現在県下高校サッカーチームの数は二〇〇

OB会が活動して行くためには、一部有志のボランティアだけでは出来ません。自分自身サッカーを楽しみながら、現役を見守つて行くことが必要です。この面で我がOB達は旧制高校OB「SOI」に参加している超OB。旧制中学OBチームの対抗戦「FUS」。六〇代のシニア、五〇代、四〇代四十雀、三〇代と年代別チームに参加、活躍しています。毎年の会報にも各々のチームの活動が掲載されておりますのでお楽しみ下さい。故岩渕さんが生前OBチームの活動がされておりました。その意向もあり、昭和五三年（一九七八年）に私、松本、岡田（三三〇）、大内（三二）、牧村（三四）の諸君と語らい同年輩のOBを集め「湘南ペガサス」を設立し、年とともに四〇代、五〇代、六〇代の年代別チームへと発展、同時に達したOBの参加できる受け皿としてOB会活動の中核となっています。また「湘南ペガサス」は湘南OBだけにとどまらず同好の方々も多く参加している点が特長です。二〇年以上にわたつて成長、活動し自由な明るいチームカラーを維持してこれたのは、この間、代表、庶務、運営などを担当してくれた大内健嗣君（三二）の尽力によるところがまさに大でした。同君は平成一三年一月六歳で逝去されました。OB会への貢献として八〇周年史に残る一人のOBでした。

を優に超え、また、三年間の短期、「黄金時代」とは比較できませんが、戦績のみの判断ではなく若い現役たちに湘南の栄光の歴史とそこで過ごした想いを伝え、OBは支援を続けて行きたいものです。

平成一三年九月全国選手権第二次予選で残念ながら敗退した時の、くやしさに泣きじやくる姿は、昔の旧制中学生と少しも変わっていませんでした。

OB皆様のますますのご支援と、若手OBのOB会活動への積極的参加をお願い申しあげる次第です。

早や半世紀

終戦から全国制覇までを振り返る

前OB会長 22回 桑田 孝

私が湘南中学に入学したのは戦争が始まった翌年の昭和一七年の四月で、戦争が終わったのは四年の一学期を終わっていた昭和二〇年の八月だったから、戦争の影響をもろに受けた学年であった。

昭和二〇年の四月に中学は四年で卒業と短縮されて仕舞つたので、戦争が終わつたときは我々が最上級生、昭和二一年にまた元の五年制に戻つたので、翌年も我々が最上級生、最上級を二度も経験した唯一の学年でもあった。

そして、我々が卒業したその後の昭和二三年の新学期より学校制度が変わり旧

制中学は無くなり、新制高校制度となつた。従つて我々が旧制中学最後の卒業生となつた訳であり、以後我々より前の者も含め旧制中学卒業組と言われるようになつたのであるが、その連中も平成一三年で全員七歳以上となつて仕舞つた。正に我々の時代、旧制時代は遠くになりけりである。

ところで、我々が三年生の一学期だつた昭和一九年の春には戦争も激しくなり、

六月に工場に動員され、朝から晩まで働くかされてしまつた。授業も受けられない具合だからサッカーニーではない。従つて我々の低学年でのサッカーニーも一年生と二年生が主で、三年はちょっとしか蹴つていなかった。もとのようにサッカーゲーができるようになつたのは学校に戻れた昭和二〇年の九月からで、みんなスポーツに飢えていたのでサッカーニー部に入つて来る者も多くいたがボールが手に入らず古いボールを修理して使つていた。しかし、そのボールも少なくみんな奪い合つて蹴つていたものである。

今、我々の時代前後の者が、後輩に何かしてやりたいと思うと直ぐボールとなり、ユニフォームとなるのは、その頃一番調達に苦労したものだからである。本当にそれらをそろえるのは売つていないのだから大変なことだった。

戦後再び全国大会が開かれるようになつたのは、世の中が少し落ち着いてきた昭和二一年で、秋に開かれた第一回国体

に分けて行われ、決勝だけが関西の西宮で行われたのである。その決勝の最後の相手が念願の神戸一中だ。前半で0-1の劣勢、逆転3-2で勝つたのだが、最後の得点が、タイムアップ寸前に入れたRWだった私のシュートだつた。勝てた

感激は強く、終生忘れられないものとなつて残つている。

しかし、勝つたのは湘南のサッカーニーを作り育てた岩渕さん(二回)、創立以来校長だった赤木校長、香川先生、浅沼先生、それに大勢の先輩達を含めたオール湘南の執念が神戸一中を破り優勝させてくれたものだと思つている。

神戸一中は、明治初期の創立で、大正終期創立の湘南とは比較にならぬ程古い歴史と伝統を誇り、文武両道に秀れた学校として有名だつた。旧制高校への進学者も多く、サッカーニーでも何度も全国大会で優勝していた。カーキ色の制服を着た神戸一中の生徒を見ると誰もが憧れと羨望の眼で見ていたものである。

湘南を創り、育てた赤木校長が創立の精神として「神戸一中を見習い、何時かは抜きたい」と念じてゐる!と言つてはいたことである。湘南のサッカーニー部も文武両道でなければならないとよく言われたものである。

今、振り返つて見ると、戦争の終わつた昭和二〇年九月より全国大会の昭和二一年一月までが戦後の湘南蹴球部の再建期で、それを契機に昭和二〇年代の湘南サッカーニーは昭和二三年の全国第二位、関東大会出場といつた何回目かの黄金時代を迎えた訳であり意義は大きい。我々が一年ちょっとで全国トップの力をつられたのは、学校も家も戦争の被害を受けずに済み、比較的早くもとの学校生活に戻れたからであり、大勢の熱心な先輩の指導があつたからと感謝している。

それ以後の大学リーグでの湘南OBの先輩達も秋の明治神宮大会では優勝し活躍も目覚ましいものがあつた。大学リ

たが、戦争の影響で神戸一中とは対戦していない。

決勝戦で当たつた神戸一中は流石に強く、レベルは神戸一中の方が高かつたと思う。その上我がチームは西宮へ出発する前日最後の練習で、CFの四年生の小林(旧姓早川)君が捻挫し出場できなくなつたので戦力が大分落ちていた。

それでも勝てたのは、最上級生の我々のクラスが七人もいて最後の最後まで勝利を諦めないと精神力が神戸一中よりも強かったからだと思う。残りの四人もよく頑張つた。

その時神戸一中にいた山路君とは早稲田に進学してから一緒になつた。彼から神戸一中の先輩から「お前達は湘南に精神力で負けていた」と怒られたと聞いた。サッカーニーでも最後にものをいうのは精神力だと思う。

戦前何度も甲子園に駒を進めた先輩も準々決勝どまりで神戸一中とは対戦できなかつた。最強といわれた昭和一六年卒の先輩達も秋の明治神宮大会では優勝し活躍も目覚ましいものがあつた。大学リ

一ヶ1部八校中、東大、早稲田、慶應、明治、千葉医大の五校のキャプテンが湘南OBだったこともある。大塚さん(一回)、田村さん(一回)、小林君(二回)、小田島君(二回)、小田島君(二回)といった全日本代表選手も輩出した。

我々旧制中学卒業のものが何時までも湘南サッカーを忘れられずに注ぎ続けていたと心より感謝している次第である。

湘南サッカー部小史

(1) 旧制中学時代

湘南中学校は大正一〇年(一九二一年)の創立であつて、当初から校友会には蹴球部を置くことに定められていた。初代校長赤木愛太郎の方針は、野球を禁止し、

サッカーを校技にすることであつた。校庭にゴールポストが立つたのは大正一二年秋。翌一三年には当時東京カレッジリーグの覇者高等師範(筑波大学の前身)の主将、後藤基胤が赴任し部長として指導を受けることができさせなスターであった。氏の先見性ある気風はその後長く跡を引いた。

全校チームが結成されたのは大正一四年、同年秋の県下中学校大会に公式戦初出場。三中(現緑ヶ丘高校)グランドで

行われ、一回戦で泥澤の中二中(現翠嵐高校)に大敗。大正一五年九月、神奈川県中等学校ア式蹴球連盟が組織され、第一回県下中学リーグ戦が行われた。鎌倉師範、浅野中学、横浜二中、関東学院、横浜三中、神奈川工業、鎌倉中学(現鎌学)、湘南中学の八校が参加。湘南は決勝で二中に0-1と敗れ二位となる。この年より、五ヶ年計画を立て、できる限り下級生をレギュラーとし、五年目の昭和五年には強チームの出現となる。県下春のリーグ戦(参加八校)で初優勝、続いて秋のリーグ戦も優勝。高等師範主催の全国大会に出場し決勝まで進出、高師付属に1-3で敗れ準優勝。翌六年も同全国大会で決勝に進出、志太中学(現藤枝東高校)と対戦。延長、再延長でも決せず、翌日の再試合でまた延長、のちのベルリン・オリンピック代表選手松永に1点叩きこまれ、ついに敗れる。二日がかりの決勝戦は中学サッカー史上これだけである。昭和七年の同全国大会では三位に終わる。これ以降戦前は、湘南が県下優勝できなかつた年は数回しかない。

昭和一二年、山静神大会で優勝し、西ノ宮の全国中学大会に初出場。一回戦で優勝校の埼玉師範に1-5と敗れる。昭和一四年、夏の甲子園全国中学大会に再度山静神代表として出場。準決勝で聖峰中に抽選負けし三位。秋の第一回明治神宮体育大会(後の国体)及び二月の関東大会でも各々準々決勝で、明星商業、豊島師範に惜敗している。

昭和二一年、復興第一回神奈川蹴球大会が春季に行われ優勝。秋季には、第一回国民体育大会の中学校代表となり東京代表高師付属中学校、埼玉代表浦和中学(現県立浦和高校)を連破。東日本地域代表決定戦では仙台中を破り決勝進出。決勝で西日本代表神戸一中と対戦、接戦の末3-2と下し全国制覇を成し遂げた。

昭和二三年、第三回国民体育大会に、関東地区予選会で東京付属中学を5-1と破り、東日本地区大会でも圧倒的勝利で決勝進出。やはり団抜けた実力で西日本代表となつた広島高師付属中と対戦、0-1と惜敗した。広島高師は元全日本ボルン・オリンピック予選にも参加した。小林は同五輪本大会を含めて代表で合計六試合出場、1得点の記録が残っている。

旧制中学時代に部長を務めたのは、以下の先生方である。佐藤尚勝、後藤基胤、金持嘉一、香川幹一、浅沼早苗。

(2) 新制高校／昭和の時代

昭和二六年の国体では、小田原高校を破り三年ぶりに県代表となるが、南関東地区予選で、北園高校に1-2と敗れた。その後も、東日本大会への出場など県下二二位の力は保持し続けた。

昭和二九年に宮原孝雄が部長、監督に就任。OBが監督という時代から、教員IIサッカー指導者の時代となる。昭和三

昭和一五年の関東大会では、決勝で明倫中学を2-1で破り優勝。全国大会では一回戦で普成中に1-8と大敗。翌六年の関東大会も、決勝で延長再延長、二時間余の熱戦の末1-0と青山師範を下し連続優勝。一七年は戦時体制下に入つたが、春季毎日新聞トーナメント大会優勝を飾り、全国大会では三位になつている。

昭和二八年、学生選抜として山口雄二(一六回)等は当時日本代表になる選手であり、湘南の黄金時代を築いたメンバード、岩渕二郎(二回)卒業後監督コート、戦前、戦後を通じて湘南サッカー部を指導、昭和二八年からは定時制教員)と共に湘南蹴球界の忘れ得ぬ人々である。

昭和二八年、学生選抜として山口雄二(二〇回)、小林忠生(二三回)、小田島三之助(二四回)が選ばれ、ヨーロッパ遠征、ドルトムント大会に出場。また、小林、小田島は日本代表として昭和三年メルボルン・オリンピック予選にも参加した。小林は同五輪本大会を含めて代表で合計六試合出場、1得点の記録が残っている。

旧制中学時代に部長を務めたのは、以下の先生方である。佐藤尚勝、後藤基胤、金持嘉一、香川幹一、浅沼早苗。

(2) 新制高校／昭和の時代

昭和二六年の国体では、小田原高校を破り三年ぶりに県代表となるが、南関東地区予選で、北園高校に1-2と敗れた。その後も、東日本大会への出場など県下二二位の力は保持し続けた。

昭和二九年に宮原孝雄が部長、監督に就任。OBが監督という時代から、教員IIサッカー指導者の時代となる。昭和三

五年には、関東大会（水戸）に出場。浦和、秩父、川口の埼玉勢を連破し、決勝で市浦和には1-2で惜敗したが、準優勝の成績を残した。

昭和三六年五月、鈴木中が赴任、二八年間、昭和が終わる年まで指導にあたることになる。一〇月、国体（秋田県）に出場。一回戦で鶴ヶ岡工に1-2と敗れる。明けて昭和三七年一月高校選手権（西の宮）に同メンバーが出場。一回戦で同大会優勝校の広島代表修道高校と対戦0-5と敗退。修道には、全日本代表、及び代表監督を務める森孝慈がいた。同年秋の国体にも出場したが、一回戦で徳島商に1-2と敗れる。

昭和四〇年七月、第八回関東大会（水戸）では、一回戦抽選勝ちのあと、千葉高、川口高、宇都宮学園を連破、決勝で帝京を1-0で下し見事優勝。翌年一月に高校選手権（西京極）に出場したが、一回戦で甲賀高校に0-1で抽選負けを喫する。

昭和三七年、三九年、四二年には関東大会に連続出場、この頃県下六〇数チームの中では最強といえた。昭和四五年前後からは、県内の大会参加校が一〇〇校を超えて、代表の座をつかむのがむずかしく、ベスト4-8位の力は持つが後一步及ばぬ時期が続く。

昭和五八年には、一六年ぶりに関東大会（東京）に出場。一回戦で帝京高校に0-6で敗れる。昭和六〇年には、OBの藤塚久雄（五四回）が新卒で湘南高校

に赴任、二人の指導体制となる。また、定時制教員の権沢龍は、昭和五八年から三年間コーチを務めた。

昭和六三年、関東大会（宇都宮）に出場、一回戦で武南に1-2と敗れた。このメンバーが続いて、高校選手権の県大會決勝で県相模原に2-1で快勝、代表の座を勝ち取る。明けて昭和の最後の年となる六四年正月、本大会では上牧（奈良）、愛知（愛知）を連破しベスト16まで進出するが、盛岡商（岩手）に0-3で敗れた。鈴木部長、藤塚監督の師弟コンビ最後の年に、久々に全国での実績を残した。

昭和四五年からは、国体が県の選抜チームでの参加となつた。湘南から、曾我敏昌、瀬戸康広（四八回）、八木啓太（五二回）、水谷隆一郎（六一回）、田村直也、若木均（六四回）、石渡弥（六九回）が選抜されて、国体に参加した。水谷隆一郎の参加したチームは、昭和五九年国体で優勝、水谷は「神奈川県スポーツ優秀選手」として表彰された。なお、平成二三年まで三二回の国体選抜チームが結成されましたが、その内八回を湘南での指導経験のある教員が監督を務めた。鈴木中（三回）、清水好郎（三回）、権沢龍（一回）、藤塚久雄（一回）ら、湘南の歴代指導者は神奈川県でトップクラスであることがこの事実からも理解できる。

場した。

(3) 平成年間

平成の一三年間では大会参加校数が二〇〇を超えることになり、大会システムも従来とは異なるものであった。新人戦は前年中にベスト64までの予選が終了しており、二年生の一月から中央大会が始まる。湘南はこの中央大会には、一二回

進出している。この六四校のみが関東大会の予選出場資格を得る。関東大会では、平成五年と七年と一年にベスト4まで勝ち上がり、本大会出場までと一勝で涙をのんでいる。高校選手権では、二次予選（ベスト24）までは六回進出。継続して県の代表争いに絡める位置につけている。藤塚久雄は平成七年に転出、平成九年からは清水好郎、平成一二年からは岩田好一が加わり、二名で指導している。（旧制中学までの部分は「湘南サッカー半世紀を経て」より転載、「日本サッカー協会の日本代表全記録」に基づき記録部分のみ加筆しました。文章中の敬称は略しました。）

初期の頃は、この三要素が未分化なまま、必要に応じて有志が活動を続けていたようだ。現在では、延べのOBが八〇〇名以上となり、全体のとりまとめはOB会事務局が行いながら、日常的な活動はOBチームが個々に活動している。微妙な感覚である。

OB会の活動には、大きく分けて三つの方向がある。第一は、後輩の指導。創立当時の数年を除くと、昭和三〇年まで

OB会活動の概要

(1) はじめに

OB会の活動には、大きく分けて三つの方向がある。第一は、後輩の指導。創立当時の数年を除くと、昭和三〇年まで

は、サッカーの専門教員がいなかつたため、OBの一一番の役割は後輩を指導することであった。第二に現役への物心両面での応援。PTA主導の後援会組織ではなく、OB会がお金の面倒までみる形態は必ずしも普遍的なものではないようだ。第三にOBチームとしての活動。青春がなつかしいという以上に、湘南で教わったサッカーはかけがえのないものだ。湘南の仲間とグランドにたてば、自分の役割や、周りとの連携が自然にできる。同じメソッドで教え込まれただけが共有可能なサッカー観と表現するしかない微妙な感覚である。

OB会の活動には、大きく分けて三つの方向がある。第一は、後輩の指導。創立当時の数年を除くと、昭和三〇年まで

はOBチームが個々に活動している。OB会事務局が行いながら、日常的な活動はOBチームが個々に活動している。

(2) 後輩の指導

創立の当初は、教員の後藤基胤が指導していたが、その後約三五年間はOBが監督、コーチを務めて現役を指導した。旧制中学は五年制であったので、在学中だけでも最長前後九学年と知り合い、さらにOBとしても指導に来るという状況で、学校に対する愛校心や先輩後輩の絆は現在からは想像し得ぬほど深いものであった。（旧制中学は昭和二三年までで、昭和二七年新制高校卒が最後の在学者）しかも、卒業生は隨時グランドに来て、マンツーマン指導をする形が続いていた

ので、ますます濃い関係となつた。その中でも象徴的な存在が岩瀬二郎（二回）である。昭和二年の卒業後監督を務め、それから半世紀以上にわたり湘南サッカーの指導にあたり、昭和二八年から定期の教員として勤務しながら、ほぼ毎日グランドにていた。歴代の監督・コーチは岩瀬二郎の指名によるものであつた。藤田得利（六回）、嶋田正彦（九回）、大埜正雄（一五回）、早川純生（一八回）、柳川明信（二七回）が、OBとして監督・コーチを務めた。

昭和三〇年富原孝雄、昭和三六年鈴木中の赴任で状況は大きく変化した。サッカー専門の監督のもと、OBの役割は、新入部員へ基礎技術を教えることと、Bチームの練習などに特化されるようになつた。大学生が時間をつくつて交代で後輩を指導するという形態にかわりはない。四年間、須藤和重（六四回）がコーチを務めた。

(3) OB会活動

昭和二〇年代に、湘南蹴球祭を一月一五日成人の日に毎年行うことになり、以来、盛衰を経ながらも今日まで存続してきた。昭和四〇年、安保隆文（一六回）、山口雄二（二〇回）、桑田孝（二三回）の呼びかけで、旧制中学のOB会を開き、初めて名簿が作られた。新制高校との橋渡しは、岩瀬二郎の定時制高校教員就任以来そのまま引き継がれ、現役への寄付

は、岩瀬の呼びかけで、隨時行われていた。この間湘南イレブン、湘南サッカー便りという会報が発行されたこともある。

昭和四五年、五二年にもOB会整備の動きがあったが中断した。

(4) OBチームの活動

昭和一〇年代は神奈川社会人リーグに「湘南OBチーム」として参加、セントジョセフ、オールブラックス等外人チームとの親善試合も行つた。戦後昭和二〇年代、神奈川リーグ復活で、再び「湘南OBチーム」とし参加。関東大会にも出場して、大宮、水戸、日立などで試合を行つた。この頃湘南OBは多士済々で、全日本代表組が多数おり、若手OB（二〇回卒以降）は試合に出してもらえず、度変わりとし、年間活動、会計の報告を行つてはいる。また、昭和五七年より年末には会報を発行し、その年のOB、現役の活動結果を記録、報告している。「湘南サッカーOB会」は、旧制中学と新制高校を含む組織とするために、「湘南高校」という言葉を使わず、あえてこの名称を使用している。OB会は、明文規約を持たない組織で会員の良識にしたがつて決定され、ボランティアの幹事による活動により運営されている。

その後、OB会長は、一二二回桑田孝（平成九年～一二一年）、二七回柳川明信（平成一三年～）が務めている。また、過去二回記念誌を発行した。昭和五六八年には、「湘南サッカー半世紀を越えて」（岩瀬二郎追悼記念）（一八〇頁）、平成元年九月には、「湘南サッカー実戦譜特集鈴木先生の二八年間」（七三頁）。平成一三年の今回、創部八〇周年では、会報のスペシャル版と会員名簿を発行す

る。

昭和一〇年代は神奈川社会人リーグに「湘南OBチーム」として参加、セントジョセフ、オールブラックス等外人チームとの親善試合も行つた。戦後昭和二〇年代、神奈川リーグ復活で、再び「湘南OBチーム」とし参加。関東大会にも出場して、大宮、水戸、日立などで試合を行つた。この頃湘南OBは多士済々で、全日本代表組が多数おり、若手OB（二〇回卒以降）は試合に出してもらえず、度変わりとし、年間活動、会計の報告を行つてはいる。また、昭和五七年より年末には会報を発行し、その年のOB、現役の活動結果を記録、報告している。「湘南サッカーOB会」は、旧制中学と新制高校を含む組織とするために、「湘南高校」という言葉を使わず、あえてこの名称を使用している。OB会は、明文規約を持たない組織で会員の良識にしたがつて決定され、ボランティアの幹事による活動により運営されている。

その後、OB会長は、一二二回桑田孝（平成九年～一二一年）、二七回柳川明信（平成一三年～）が務めている。また、過去二回記念誌を発行した。昭和五六八年には、「湘南サッカー半世紀を越えて」（岩瀬二郎追悼記念）（一八〇頁）、平成元年九月には、「湘南サッカー実戦譜特集鈴木先生の二八年間」（七三頁）。平成一三年の今回、創部八〇周年では、会報のスペシャル版と会員名簿を発行す

は藤沢リーグで活動していたが、平成八年の神奈川県郡市大会で優勝、八〇〇チークの頂点にたつた。翌平成九年からは県の社会人リーグに加盟し、その後一部昇格を果たし、現在も活動している。

昭和五九年から、旧制高校のOB大会「サッカーボブインターハイ」大会を組織し、ここに湘南OBが個人として多数参加。昭和五九年から、旧制中学OBの六チームが全国より集まって旧制中学選抜蹴球大会を開催、湘南中OBチームとして参加。これに代わって、平成八年からは、FUS（付属浦和、湘南）サッカー交流会が開催され、新制高校OBも参加している。この他、蔚谷スープアエイジ大会（平成六年～）、全国OBサッカーブレ大会にも参加。旧制中学・新制高校OB大会にも参加。旧制中学・新制高校OB中心の単独チームは、スーパーエイジ（六〇歳以上）では全国でも例がない。

昭和五三年、新制高校OBの二七回から三四回を中心とした四〇代のチーム「湘南ペガサス」（岩瀬二郎が命名）が結成された。当初は、個別に練習試合を組むなど現在まで四〇年近く継続している。高校卒業後にサッカーを継続できる、湘南OBの基礎となる重要なチームである。この他にも、OBがかかわって、アンテロープス（四一回～四五回）、湘南ボールゲームクラブ（四五回～五四回）などのチームが結成された。平成元年の高校選手権出場世代が中心の「湘南トトカルチョ」

は藤沢リーグで活動していたが、平成八年の神奈川県郡市大会で優勝、八〇〇チークの頂点にたつた。翌平成九年からは県の社会人リーグに加盟し、その後一部昇格を果たし、現在も活動している。

昭和五九年から、旧制高校のOB大会「サッカーボブインターハイ」大会を組織し、ここに湘南OBが個人として多数参加。昭和五九年から、旧制中学OBの六チームが全国より集まって旧制中学選抜蹴球大会を開催、湘南中OBチームとして参加。これに代わって、平成八年からは、FUS（付属浦和、湘南）サッカー交流会が開催され、新制高校OBも参加している。この他、蔚谷スープアエイジ大会（平成六年～）、全国OBサッカーブレ大会にも参加。旧制中学・新制高校OB大会にも参加。旧制中学・新制高校OB中心の単独チームは、スーパーエイジ（六〇歳以上）では全国でも例がない。

昭和五三年、新制高校OBの二七回から三四回を中心とした四〇代のチーム「湘南ペガサス」（岩瀬二郎が命名）が結成された。当初は、個別に練習試合を組むなど現在まで四〇年近く継続している。高校卒業後にサッカーを継続できる、湘南OBの基礎となる重要なチームである。この他にも、OBがかかわって、アンテロープス（四一回～四五回）、湘南ボールゲームクラブ（四五回～五四回）などのチームが結成された。平成元年の高校選手権出場世代が中心の「湘南トトカルチョ」

は藤沢リーグで活動していたが、平成八年の神奈川県郡市大会で優勝、八〇〇チークの頂点にたつた。翌平成九年からは県の社会人リーグに加盟し、その後一部昇格を果たし、現在も活動している。

昭和五九年から、旧制高校のOB大会「サッカーボブインターハイ」大会を組織し、ここに湘南OBが個人として多数参加。昭和五九年から、旧制中学OBの六チームが全国より集まって旧制中学選抜蹴球大会を開催、湘南中OBチームとして参加。これに代わって、平成八年からは、FUS（付属浦和、湘南）サッカー交流会が開催され、新制高校OBも参加している。この他、蔚谷スープアエイジ大会（平成六年～）、全国OBサッカーブレ大会にも参加。旧制中学・新制高校OB大会にも参加。旧制中学・新制高校OB中心の単独チームは、スーパーエイジ（六〇歳以上）では全国でも例がない。

昭和五三年、新制高校OBの二七回から三四回を中心とした四〇代のチーム「湘南ペガサス」（岩瀬二郎が命名）が結成された。当初は、個別に練習試合を組むなど現在まで四〇年近く継続している。高校卒業後にサッカーを継続できる、湘南OBの基礎となる重要なチームである。この他にも、OBがかかわって、アンテロープス（四一回～四五回）、湘南ボールゲームクラブ（四五回～五四回）などのチームが結成された。平成元年の高校選手権出場世代が中心の「湘南トトカルチョ」

平成一三年現在で、ジュニアが三〇余名、六〇歳以上も含めたシニアが七〇名程の会員数となり、およそ一〇〇名がペガサスの名の元で活動している。平成年間のこれらチームは、湘南OBにメンバーをこだわらず、外部の同好の士も受け入れて幅広く運営している。この活動が「湘南サッカーOB会」の四〇歳以上を支え、また新たにこの年齢を迎えたOB達の受け皿として機能しており、今後も中核となっていく組織になってきていく。

負けず嫌い・挑戦

元顧問

54回

藤塚 久雄

この八〇周年記念誌に寄稿する機会を得て、湘南に在籍した二年間を振り返ってみた。

一九八四年春、新規採用者の最終面接は新採用教員の来るところではない。が、一九八四年春、新規採用者の最終面接は新採用教員の来るところではない。が、は漠としていたが母校に何か足跡を残そうとがむしやうに張り切っていたことを覚えていた。ある職員会議で、先輩教員が「転任者と新採用者は、採決で挙手を

すべきではない」と言い切った。当時はそんな雰囲気であった。とにかく、このような背景に支えられた張り切りは當時の生徒諸君には大きな迷惑だったかも知れない。

一年目、女子バスケットボール部とサッカー部の両方の顧問になった。女バスには一度顔を出しただけで、幽霊顧問としてフェイドアウトをした。

一九八六年夏。大きな転機を迎えた。

体育センターでの研修大会で選手と衝突。その後、日大高校の夏合宿に呼ばれての

大との試合の出来は上々であつたし、B戦では自分も出場し後の選手権出場の選手達に手応えを感じていただけにショックであった。「はい、わかりました」と

は言えず、あまり突っ込んだ会話には発展しなかつた。結局、この話もフェイドアウトしていくが、二度とこのようない話が出ないようにしなければと、チーム

への取り組みを見直すきっかけとなつた。この夏のネパールへの私事旅行も、サッカーに対する取り組みを再考する契機となつた。経済的に豊かではないネパールの子供達が煉瓦二個をゴールとして、ぽろぽろのボールでサッカーを楽しんでいる。恵まれた環境の我々は適当にサッカーをしてはいけないと強く感じた。

この二つの出来事が自分の中で大きなバネとなっていたことは確かである。

OB会の名簿をパソコンで整理する仕事

事を、現役のマネージャーとともに進めた。先輩への活動報告の充実が、現役への寄付増額につながつていった。最初の住所録を部員全員で折り込んだり、はがきの案内を部員持ち寄りのプリントゴットですったりしたことも想い出に残つてゐる。しかし、間違いや不備が多くあり、苦情や叱咤を受けたことも事実である。ここで再度その際の失礼をお詫びしておきたい。

朝練習は体に良くないと、アドバイスされた。確かにそうかも知れないが、高校生年代のサッカーがおもしろくて、やりたくてしょうがない選手には当てはまらないと考へ試験を除く学期中はほぼ毎朝ランニングを中心とした練習をした。5対2のボール回し、ミニゲームにより選手間の意志の疎通や統一を図つた。夏には海岸練習。ビーチサッカーの為にローンを持って川沿いの道を走つていて部員が警官から職務質問されたこともあつた。どこかの工事現場から持ち出したものと勘違ひされたらしい。海岸四〇分間走は過酷であり、救急車を呼んだこともあつた。搬送先の救急指定病院で、選手の砂を落とさなければ受け入れないと言つたものだつた。なぜか準決勝、決勝とも負ける気は全然しなかつた。一方、挑戦者としての心構えは崩さないでいた。三ツ沢球技場で試合球を買いに行かせ、直前の練習で蹴らせておくなどのできる準備は怠らなかつた。

この年、体育祭の教員側実行委員長をしてはいた。昭和天皇のご病状が思わしくない秋であった。係として雨天順延となるのに、外部からはお祭り騒ぎは自席せ

一九八八年関東大会、選手権大会出場。

関東大会県予選決勝で0-4の大敗を喫した藤沢西と選手権大会の準々決勝で対戦する組み合わせとなつたにもかかわらず、三年の主力がほぼ選手権大会をめざしたことは、うれしかつた。妙に損得の計算高い生徒が多い中、全国へという夢を持って高校サッカーに打ち込む選手はなかなかできることではない。引退した選手や辞めていった選手を非難するものではない。各自の選択は悩んだ末の最善の行動であつたと信じている。ただ、夏前に辞めた一年生が選手権出場決定後、再入部を希望し選手権出場記念の物品を手に入れるとしてまた辞めていったのは参つた。こんな小狡い奴も湘南にいたのだ。

藤沢西戦の前日には、全てのなし得ることは尽くした、明日は全力を尽くすのみという雰囲気であった。一点差のゲームをものにしたとき、新聞の取材に「これで優勝しかありません」と自然に答えたものだつた。なぜか準決勝、決勝ともたるものだつた。なぜか準決勝、決勝とも負ける気は全然しなかつた。一方、挑戦者としての心構えは崩さないでいた。三ツ沢球技場で試合球を買いに行かせ、直前の練習で蹴らせておくなどのできる準備は怠らなかつた。

この年、体育祭の教員側実行委員長をしてはいた。昭和天皇のご病状が思わしくない秋であった。係として雨天順延となるのに、外部からはお祭り騒ぎは自席せ

よとか、雨天でも実施して早く終わらせろといった圧力があつた。二日間連続順延した。しかし、実施当日も雨天のため仮装以降の競技は中止した。順位を決める方法を巡り、全校生徒が体育館に集合し話し合いがもたれた。体育祭の勝ち負けに一喜一憂したものなら想像に難くなかった。しかし、体育館では殺氣立ち白熱した議論が交わされた。生徒はかなり興奮していたが各色総務長や、生徒実行委員長の粘り強い議事進行により、総意の結論を得ることはできた。この時ほど教員として、湘南の生徒は「すごい！」と思つたことはない。この時の生徒実行委員長は、湘南初の女子委員長であった。自分を含め教員側実行委員三名だけが生徒と向き合つた。約一五〇〇人対三人。他は、職員室から出てこなかつた。教員仲間はあまりあてにできないと思つた。余談。

一九八九年正月。不謹慎であるが、昭和天皇のご逝去がもう一日早ければと思つた。一回戦、奈良県代表上牧高校戦開始直後にFW木村が負傷退場。この試合はPK戦で勝つことができた。二回戦、愛知高校戦は関佳史先輩が手に入れてくれたVTRを参考としたスカウティングによる作戦が的中し勝利を得た。鹿島アントラーズで現役を続ける秋田選手がいた。選手の疲労はピークを迎えていた。医師高橋正純先輩による治療や、宿舎に於ける鍼治療などの最善のケアは実施したが、三日連続となつた三回戦の盛岡商業戦の前にご逝去による一日の休養が

得たかった。大会終了後ベンチでガムを噛んでいた自分に対して不謹慎であると叱りの電話が少なからずあつた。とにかく、日本一の夢は後輩に持ち越された。よく短絡的にトトカルチヨ事件と結びつけて、その汚名をそそぐ心意気に燃えだからこそ全国大会出場だという人がいる。それまでの選手の努力の積み重ねを知る当事者としては到底受け入れがたく、聞き流すことにしてはいる。この成果は、湘南の伝統、鈴木中先生の熏陶、湯浅健二先輩のアドバイスなど諸先輩やOB会組織としての現役へのバックアップ等々を基盤した上に、選手諸君の活躍があつたからこそなのである。湘南サッカーの総力戦の結果ともいえる。トトカルチヨは本質ではないのだ。OB会には、これからも現役が栄冠に手が届き易くなるよう、より高く、より質の高い土台の構築をお願いしておきたい。

語り尽くせないが、選手権に出場した選手だけでなく優秀な人材が多くいたことを忘れてはならない。怪我に苦しんだ経験から、スポーツ整形外科を極めて行こうとする者や、筑波の大学院に進みスポーツ少年団活動をサポートする者。大学でキヤブテンを任された者、さらに社会人チームでサッカーを続けている者など。

「あいつは湘南サッカー部出身なんだよ」と、ちょっとした自慢ができる存在ばかり多いのだ。長くなつたので、今回はここまでとしたい。

私が退職した年「湘南のサッカー部」に専門家の顧問教諭が誰も居なくなつてしまつた。伝統あるこの部を誰か面倒を見なければ……いろいろ思案したが良い智恵が浮かばず、次の先生が来るまでの「つなぎ」で「嘱託コーチ」を私が引き受け二年で清水先生にバトンタッチした。

湘南を卒業して

元顧問

鈴木 中

もしこれがなかつたらどうなつていただろうか。幸いに流れは順調に行つてはいるがなかなか代表の座を勝ち取ることが出来ない。現役の状況はホームページに時々載せてるのでここでは簡単に触れた。どうしても理解できない事が幾つかあるが、その1は選手権予選の前に三年生の中心選手が引退してしまう(七月二二日)。今年は主将・中盤・GKが抜けてしまった。そんなチームで一次予選を勝ち上がったのは立派だった。理由を聞いてみると「体育祭に専念したい」と言ふ答えが返ってきた。私にはどうしても理解できない。歴史は繰り返すと言うが昭和40年代の様に「中学の優秀選手」がまた多数入学してくる、即ち湘南の入学条件が以前のように幅が広がり、学区外の入学定員が大幅に増えたので、良い選手の入学が増していくのではないかと思う。私が口を酸っぱくして言つてはいる。高校選手権に挑戦する事は自分の人生に必ずプラスになる。後悔する事はない。大学受験は何回でも挑戦出来る。

「高校サッカーは一度しか挑戦できない」また過去を振り返るのはあまり好きではないのでここでは現在と将来の湘南サッカーについて少し書いてみたい。

私が退職した年「湘南のサッカー部」に専門家の顧問教諭が誰も居なくなつてしまつた。伝統あるこの部を誰か面倒を見なければ……いろいろ思案したが良い智恵が浮かばず、次の先生が来るまでの「つなぎ」で「嘱託コーチ」を私が引き受け二年で清水先生にバトンタッチした。だが、ノックアウトのゲームにはこの勝ち方しかないだろう。勝たなくても良い、

楽しく技術を披露できれば良いと言うサッカーモード。ではその為にはどうするのか、いろいろな要素があるが、①球際に強い事・競り合いに強い事・出足で相手より早くボールを処理する事・ヘディングに負けない事等々「相手との接触プレーに勝つ事」これがサッカーモードの大原則である。

②1対1で勝てなくとも2対1で勝つ・バスで相手を崩すこと。攻撃の中心を正確なバスとコントロールにおいている。いろいろと難しい事を言う人がいるが特に高校サッカーはこの「接触プレー・出足で勝つ」これがサッカーモードの原点だと信じて時には大声を出し、また説明し、煽って、宥め透かして、アメとムチで叩き上げるのが良い指導だと今でも信じている。これは古今東西、高校生の指導の原点であると言うことには異論はないだろうと思っている。

監督
清水 好郎

5年間を振り返つて

ト16、選手権予選ではベスト24に進出することができました。特に総体予選では、本年度の総体、選手権代表の桐蔭高校を相手に0対1という結果でした。勝負では負けましたが、試合は「湘南ペース」という、よい内容のものでした。

やればできるという自信が選手達に芽生え、その後の練習は厳しい内容となりました。彼らは勉強との両立に苦しんでいる。自分自身も一〇年くらい若い気持ちで、私立校上位の高校サッカー界に風穴を開けたいと思っています。

勝負に徹した厳しいサッカーモード。選手達と共に頑張りたいと思います。OB各位におかれましても、今後共、ますますのご支援ご協力の程を、お願いいたします。

九九年に、関東予選で、代表決定戦まで進出した試合が悔やまれます。選手達に実力を充分に発揮させることができず、責任を感じています。その後は、バランスの良いチームがで

きましたが、春に結果が出せず、選手達は自信を失いました。また、怪我人が出るなどして、選手権予選では、良い結果が出せないで終わってしまいました。

今年のように、技術も高くなく、戦術

的な幅も狭いチームでも、選手達が自分達の力を信じ、できることを一生懸命やり、頑張ったことで、総体予選ではベス

ト16、選手権予選ではベスト24に進出することができました。特に総体予選では、

創部八〇周年をお祝い申し上げます。

湘南高校に赴任し早や三年、サッカーボークとして二年が過ぎようとしています。一年間は、サッカーボークを外から見させていただきました。普段の練習内容は、誠に単純な基本練習の繰り返しのようと思われました。ところが顧問としてグランドに出るようになって気付いたことは、この単純な基本練習こそが湘南サッカーモードの根幹となっているということでした。インサイドキック一つを例に採つてみても、蹴るタイミングやどのようボールに回転を加えるのか、どちらの足に蹴るのかなど、一蹴りのキックなのにほとんどの生徒がバスの質を考え、いろいろな要素を含ませながら練習をしていることがわかりました。ボレーシュートにおいては、ボールを蹴るのではなく、ボールを足に乗せて擦らせるよう蹴るなど、一つ一つの基礎的動作に高度な技術が繰り込まれていました。

以上のように、基本練習、戦術面、フ

ィジカル面、どれをとっても、他の高校と比較して引けを取らないばかりでなく、大変独創性に富んだものだと思われます。

生徒達は、湘南高サッカーボーク創部八〇年の伝統の持つ重みが、生徒達の中にいい意味でプレッシャーとして働き、ゲームの中に浸透していることがうかがえます。「絶対に勝つんだ!」という姿勢が随所に現れています。どんなに厳しいゲームでも、この伝統に裏打ちされた自信がプレッシャーとなって選手に働き、接戦をものにしてきているのではないでしょか。今年度のインターハイ予選や全国選手権一次予選会が良い例でした。特に全国選手権一次予選会は、相手の技術が上だろうが下だろうが、全ての試合に

湘南2年間を振り返つて

顧問 岩田 好一

湘南高校に赴任し早や三年、サッカーボークとして二年が過ぎようとしています。一年間は、サッカーボークを外から見させていただきました。普段の練習内容は、誠に単純な基本練習の繰り返しのようと思われました。ところが顧問としてグランドに出るようになって気付いたことは、この単純な基本練習こそが湘南サッカーモードの根幹となっているということでした。インサイドキック一つを例に採つてみても、蹴るタイミングやどのようボールに回転を加えるのか、どちらの足に蹴るのかなど、一蹴りのキックなのにほとんどの生徒がバスの質を考え、いろいろな要素を含ませながら練習をしていることがわかりました。ボレーシュートにおいては、ボールを蹴るのではなく、ボールを足に乗せて擦らせるよう蹴るなど、一つ一つの基礎的動作に高度な技術が繰り込まれていました。

また、戦術面においては、4対2(特にライン際)や3対1でのディフェンス、二人での突破、三人での突破といった練習をベースに、自由な発想が取り入れられていきました。雨の日の試合では、ドリブルのストップ＆ゴーをタツチライン際に向かって進んだり、ラグビー戦法を取り入れるなど非常にユニークな戦術を清水先生は行っています。普通はちょっと考えられない戦術ですが、これは相手に考へられないと、かなり厄介な戦術です。

おいて、1対0という結果でした。

湘南高サッカー部の歴史と伝統を背負った生徒達、プレーヤーとしては当然ですが、たとえレギュラーにならなくとも、将来は指導者となる者も出てくると思

ます。そんな選手達を高校三年間という限られた期間ですが、最後まで面倒を見て上げたいと思っています。その為には「サッカーが好き」であることが必要条件で、それを継続させて卒業を迎えさせたい。そして、どんな形にしろ社会に貢献できる人間に育つて欲しいというのが私の願いです。

部の今後の課題としては、メディア面のチェックはOBの方々の御協力により、大変充実していますが、日頃のゲームでのちょっとした怪我等に対応できるトレーナーが必要ではないかと感じています。トレーナーシステムを導入し、選手一人一人の個人カードを作成するなど、健康管理面を徹底し、より良い環境でサッカーの練習ができるようになればと考えております。

二年間を振り返り、感じたままを羅列しましたが、今後とも、OBの方々のご支援を元に、清水先生と一緒に皆様の期待にそえるよう頑張って参りますので、宜しくお願い申し上げます。

(岩田先生は、小田原高校サッカー部OBで、小田原シーガルズのメンバーであります。高校の指導が優先で、四十雀にはほとんど出場できないとの事です。)

湘南サッカーが 与えてくれるもの

元 コーチ
63回 須藤 和重

たらしめることができたか、大事な使命を果たせたかどうかはわからないが、自分が湘南サッカーに関わることができて感謝している。

自分が現役の最後の試合は、体育祭当日、藤沢西高で日大藤沢とのベスト16。総体後も残つて選手権を目指したのは、それまでの自分に満足行くことなく、レギュラーを目指して正月の本大会に出た結果として必ずついてくるものなのか。

新人戦、関東、総体、選手権。高校生活における公式戦はこの四大会で、県制覇大成とすると、常に力を出し切れず敗れ去つてしまつた感があるのはそれは負けた結果として必ずついてくるものなのか。その日藤戦は残つた三年が四人で二人がレギュラーだったということもあり、もう一人とサブでベンチに入り、開始早々から立て続けに2点を先行されたまゝ後半残り一五分からもう一人と共に出場させてもらい、GKもハーフウェーまであがつて取り返そうとしたが、逆に留守を突かれて0対3で敗れたのを思い出す。

この時自分はフィールドで何をしたか、思ひ出し、悔しさと苦々しさを繰り返す。だがこれは負けた試合であつて、勝つた試合はもつとたくさんあり、勝利の喜びと達成感や清々しさを味わう。

小学生の頃はじめてボールを蹴つたときから、上手くなりたい、試合で勝ちたい、のは今現在でも変わることはないが、

選手権の試合を湘南サッカー現役の集大成とすると、常に力を出し切れず敗れ去つてしまつた感があるのはそれは負けた結果として必ずついてくるものなのか。その日藤戦は残つた三年が四人で二人がレギュラーだったということもあり、もう一人とサブでベンチに入り、開始早々から立て続けに2点を先行されたまゝ後半残り一五分からもう一人と共に出場させてもらい、GKもハーフウェーまであがつて取り返そうとしたが、逆に留守を突かれて0対3で敗れたのを思い出す。

この時自分はフィールドで何をしたか、思ひ出し、悔しさと苦々しさを繰り返す。だがこれは負けた試合であつて、勝つた試合はもつとたくさんあり、勝利の喜びと達成感や清々しさを味わう。

毎日毎日少しずつ積み上げる技術と体力と戦術、そしてチームとしての戦略、スタイル。湘南サッカーとは何か、勝つために、全国大会へ、毎年日々繰り返す結果でなく続く道の中で、現役の選手に、サッカーに対する情熱を燃やしつづけさせられたか、湘南サッカーのOB、OG

トッププレーヤーになりたい、という目標ではなくなつた。しかしマラドーナにあこがれ続け、九〇年イタリアW杯を開幕から決勝までローマで一ヶ月以上滞在し、観戦し、本物を生で見て、大会の熱狂や陶酔感とそこで知り合つた人たちとの経験は今でも記憶に鮮明だし、サッカーと湘南クラブで藤沢リーグを勝ちトトカルチョ湘南となつて県でも少し活躍して、社会人の神奈川県リーグへ加入していく時期もプレーヤーとして充実していたし、チームマネジメントや監督としての役割も加わり、サッカーをプレーヤーだけではなくもつと広範囲に多角的にとらえなければならなくなつた。ますますサッカーが面白くなつた。

そしてOBコーチとしての経験もサッカー人生に書き加えられた。これからも湘南サッカー全国大会へと願うティフォジとしてサッカーを楽しみたい。

高校三年間のサッカーの集大成を発揮できたのか、出場させてもらった感謝とともに、選手権まで残つた満足感とレギュラーでないせいもあつただろうが、涙が止むほどの悔しさではなかつたような気がする。そしてこの後大学へ行つて本格的なサッカーに挑戦しないことの決心のきっかけにもなつた。これが現在の自分のサッカー人生において良い悪いといふよりサッカーにかかるスタイルが決まつたと思う。

鮮やかに残る記憶

64回 田村 直也

「ド——ソツ！」というものすごい地響きのような音……高校サッカー初戦の対上牧高（奈良県）戦、後半一〇分過ぎに得点したときに大歓声とともに感じた音です。

自陣からファイードされたボールを追い、自陣からファーストタッチでキーパー以外の敵は感じることがなくなるほどスピードに乗じ、ゴール前中央でキーパーと一对一に。その瞬間、ゴールに目をやるとやや前に出てきたゴールキーパーは右寄りのポジションをとつており、ゴール左にポツカリと確実にゴールできるシュートコースが目に飛び込んできたのだ！……（ゴールを確認した）そして右足でシュート！ ボールはゴールネットに向かっていることを見認し、体は自然と湘南大応援団のいるパックスタンンド側へと向かっていまして。そんな喜びに満ちた私は恐怖を感じるほどの爆発音のような大歓声と三ツ沢球技場のスタンドが倒れてくるのではないかと思うほどの地響きのようなものを感じるとともに、それまでの不安と苛立ちは最も開放されたことを思い出します。

試合開始と同時に「今日は必ず勝てたのだろうか？」あと数日で三歳にな

る！ 勝たなければいけない相手だ」と私は感じていました。きっと選手全員が感じたことだと思います。ところが湘南の持ち味である早い攻撃を何度も仕掛けたが得点することができず、そればかりか前半途中でのCF木村の重傷により得点パターンを失い、いくら攻めても得点できない苛立ちと木村の負傷交代という不測の事態に精神的に混乱していました。

ハーフタイムの間、強気な言葉が飛び交う中、私は予選を通じても感じ得なかつた漠然とした不安が拭えませんでした。

そして後半開始間もなくして自らの得

点で先取点を奪うことと、得点できない苛立ちから開放され、漠然としたもやもやした不安も和らいだのです。それは自分

が得点できた満足感によるところもあつたかも知れません。しかし力強い支えになつたのはあの「大歓声」と押し寄せれる「地響き」でした。それは湘南大応援団からだけではなく球場全体からの大声援でした。観客が何万人、何千人いたといつた数字のことではなく、当時の現役

スポーツへの多用なかかわり方の中でサッカーから学んだこと

68回 奈良 光晴

このたび湘南サッカーOB会報に執筆させていただることになりました。現役時代になんの功績もない私にこのようなできなかつた全国大会への想いや惜しきも出場できなかつた悔しさやストレスが一気に爆発した瞬間のよにも感じました。

現役当時、私はけがに悩まされ満足にプレーすることはできませんでした。そのためプレーヤーとしての思い出は、同期のなかでも少ない方だと思います。そ

ろうとしているということは、三月で卒業後もう一三年が経つことになります。

確かに湘南サッカー部の同友のほとんどが結婚し、中には三人目の子供をもつようになる者もいるわけで、「二三年」という時間の経過はある意味驚くに値しないことなのですが、私にとって湘南でのサッカー生活は「二三年以上もの昔話」ではなく「今でも鮮やかに蘇る少し前の記憶」という表現が適切だと思うほどで、体力の減退を除けば時間の経過をあまり実感したことはありませんが、「二三年」の経過は決して短くない時間と言わざるを得ません。

今度は私も観客席で力いっぱい応援できる日を心待ちにしています……

私は大学卒業後、大学院に進学しスポーツ社会学を学びました。私が進学した一九九八年は日本代表がフランスワールドカップに出場したにもかかわらず、Jリーグの凋落が取り沙汰され始めたときでした。そのような状況の中で、サッカーに対して、単なるサッカーファンとしてだけではなく研究者として意見を持ちたいという気持ちで進学しました。

当初はサッカーそのものについて学びたいと思っていたのにもかかわらず、講義で扱う内容はスポーツ全般についてのためプレーヤーとしての思い出は、同期のなかでも少ない方だと思います。そ

んな私の思い出の中で鮮明に残っていることは、笑われるかもしれないが、藤塚先生に生活面で注意されたことです。

「湘南高校は学校としては服装は自由だが、サッカー部は制服着用時は襟付きの白いシャツを着るよう」いう注意を受けました。私は湘南高校は自由な校風と聞いていたので、まさか服装のことで注意を受けるとは夢にも思っていませんでした。また服装面以外にも遅刻などに

も細かく注意を受けたこともあります。高校生当時、サッカー部員である限りサッカーで最高のパフォーマンスを發揮すれば良いので、なぜ生活面で細かく注意されなければならないのかと面従しかしこうした「教え」が、その後の私の生活において大きな意味を持つことに

なつたのです。

した。しかし大学院材在学中には数多くの現役のトップアスリート、元トップアスリート達と共に生活する機会に恵まれ、多くの話を聞くことができました。そのなかで彼らが一様に「口を揃えて言つていたのが『アスリートである以前に一社会人である』」ということでした。トップアスリートの中には確かに派手な生活をしている人間がいますが、私が出会ったトップアスリートの多くは「自分は多くの人々から注目されている。スポーツの社会的地位の向上のためにはそのことを自覚し、人間的に成熟していることを示さなければならぬ」ということを強く意識していました。

また日本オリンピック委員会の「アスリートの一貫指導システム構築」に向けたプログラム作りの調査研究に携わりましたが、そこでも競技力の向上というだけでなく、社会的な模範となるアスリートの養成ということが課題として掲げられていました。

つまりトップレベルのアスリートでさえ、もはや良いパフォーマンスを發揮するだけでは許されないのであり、常に見られていることを自覚しながら生活しなければならないのです。高校生のときには、ある意味で高校生らしさを損なわせない配慮もあつたのかもしれません、「サッカープレーヤー」として自覚を促していたのだと今更ながら気付きました。

さて現在私は将来的には研究職につきたいという夢を抱きつつ、財団法人日本体育協会に籍を置き、スポーツ少年団の育成に携わっております。全国少年サッカー大会は日本サッカーアクションの4種登録をしていれば参加できること、神奈川県自体がスポーツ少年団の育成に熱心でないことから、皆さんにとつてスポーツ少年団という名前は聞いたことがあっても、実態がつかめないものかもしれません。

このスポーツ少年団はスポーツを通じた青少年の健全育成を目指し、発育発達に応じた指導を行うことによって生涯にわたってスポーツを楽しめる子供を育てることを目的にしています。青少年の健全育成という意味においては高校時代に生きてきた教訓から思うところは多くあります。高校時代のサッカーチームで実践しておりますが、その際に週一度ではありますがフットサルを実践しておりますが、その際に「高校時代からサッカーをやり直したい」という思いに駆られる時があります。当時

は今こそプロリーグとしてのJリーグがあり、日本代表の活躍もあり、サッカーは確固たる社会的地位を築いていますが、この隆盛も先人達の地道な努力があつての物ですから、私達が日常生活の立ち居振舞いにも気をつけなければならないのは当然だったのかもしれません。

さて現在私は将来的には研究職につきたいという夢を抱きつつ、財団法人日本体育協会に籍を置き、スポーツ少年団の育成に携わっております。全国少年サッカー大会は日本サッカーアクションの4種登録をしていれば参加できること、神奈川県自体がスポーツ少年団の育成に熱心でないことから、皆さんにとつてスポーツ少年団という名前は聞いたことがあっても、実態がつかめないものかもしれません。

このスポーツ少年団はスポーツを通じた青少年の健全育成を目指し、発育発達に応じた指導を行うことによって生涯にわたってスポーツを楽しめる子供を育てることを目的にしています。青少年の健全育成という意味においては高校時代に生きてきた教訓から思うところは多くあります。高校時代のサッカーチームで実践しておりますが、その際に週一度ではありますがフットサルを実践しておりますが、その際に「高校時代からサッカーをやり直したい」という思いに駆られる時があります。当時

は当時で考えてやつてはいたつもりですが、今思うと何も考えていないかったと思います。現役の皆さんには無限の可能性があります。どんな些細なことでもそれが将来何をもたらすか分かりません。多くのことを吸収して頑張ってください。

校舎改築中のサッカーチーム

69回 石渡 弥

主な活動場所は、善行の荏原製作所内グランド・大清水高校横の大清水グランド・湘南台そばの秋葉台公園の三ヶ所であった。移動の時間が往復でかかるため、自転車で移動すべきところをウォーミングアップを兼ねてランニングで移動することに決め、スピードと着替えのシャツを抱えて走つてグランドに向かつたのが懐かしい。いまでも、その道を車で走る時は当時を思い出してしまう。

その様な藤塚先生とサッカーチームの部員が理解をし、恩返しは大会で活躍し、結果を残すことであるとチーム一丸となつて練習に励んだ僕らは早くも春の関東大会の神奈川県予選で代表決定戦に駒を進めたのだが、惜しくも桐光学園に1-0で敗れ、出場することができなかつたのは、今でも心残りである。

ご存知の通り、湘南高校の土地は大きく二段に分かれ、上が校舎、下がグランド・体育館となつてゐる。(そのもつと昔は私の知る限りではないが……)

校舎改築の際には、下にあるグランドで活躍し、結果を残すことであるとチーム一丸となつて練習に励んだ僕らは早くも春の関東大会の神奈川県予選で代表決定戦に駒を進めたのだが、惜しくも桐光学園に1-0で敗れ、出場することができなかつたのは、今でも心残りである。

その後インテラハイ・全国高校サッカー選手権大会もベスト8止まりで全国大会

授業だけでなく、部活動全体に大きく影響を受けることになつた。考えてみれば仕方のないことだつた。

そこで僕らは練習の場所を失つた訳だ

が、当時監督であつた藤塚先生がこの問題の発生以前から、いろいろなところに掛け合つていただき、卒業生の先輩方の

ご尽力も頂き練習場所がないので活動が出来ないという日は一日たりともないという苦しい中で恵まれて練習ができたの

であつた。

には出場はできなかつた。

円陣

73回

米山俊直

この度は湘南サッカー部創立八〇周年、おめでとうございます。自分の歩んできた三年間の前にも更に何十年もの歴史と伝統が積み重なつてることを考えると、ただただ感服するばかりですし、同時に自分がそのサッカー部の一員だつたことを誇りに思います。

今現在はOBとして湘南サッカー部に関わつてはいるものの、卒業がつい三・四年前だつたこともあり、グランドにいざ出るといつつい自分も現役の彼等と一緒に、の気持ちになつてボールを追つてしまつます。未だにインサイドひとつにして走るフォームにしても現役に負けないくらいのこだわりは持つてゐるつもりですしね。こんな風にして今でもサッカーに対しても、そして私生活においても真剣さや高いモチベーションを維持しようと努められるのも、自分の大切な高校三年間をこの湘南サッカー部で過ごせたからなのだろうな、と実感しています。僕等の先輩方には全国大会に名を連ねるほどの素晴らしい成績を幾度と修めてきました。自分自身、田村先輩や若木先

輩が全国に出場した時には湘南高校の名は認識していないにせよ小学生ながら何度もビデオを観て勉強した（気になつていた）のを覚えていました。自分にとってはテレビの中のことでしたから、自分が高校での先輩方（トトカルチヨ）と試合させていただいた時はなんともいえぬ不思議な気分でした。そんなこともあって、僕にとつて湘南サッカー部は歴代の実績ある先輩方とコンタクトできる貴重な場でした。もちろん、それは今でも変わりません。

では、僕等の代の湘南サッカー部はどうして、他の先輩、後輩もしたことのない本当に珍しい体験をした代であつたと思います。というのも、僕等は三人の監督の指導を経験したからです。一年一年、異なる監督の指揮の下でプレーしてきました。一年生時は鈴木中先生、二年生時は清水先生、そして三年生時は清水先生でした。それぞれの先生にはそれぞれの指導法があり、僕等はそこから様々事を学ぶことができました。教えていたいたい事が多すぎて、ここでは到底書ききれませんが、言える事は今ではその全ての経験が総体として僕等の財産となつているということです。

一年一年で環境が変わることについて、関しては、とまどいもあり、多少不安もありました。監督の交代といったことの他にも、新校舎・新グランドなど環境の変化はありました。しかし振りかえつてみると、自分達自身むしろその変化を樂

しんでいたとも思います。そして“もつと強くなるため”に積極的に自分達から変わろうとして、キャプテン・副キャプテン、そしてあの勝俣君を中心に必死にはテレビの中のことでしたから、自分が高校でのトレーニング、ブラジル体操、スペイクルテープなど…誰かが提案し、疑いながらも皆ができる事から主体的に行動に移していました。

一番サッカーを充実してできたのは、やはり三年の選手権予選の夏でした。清水先生の指導は斬新的でしたし、全てが新しく感じられました。年齢的なものも関係すると思いますが、新しい事をしていいるという実感は、当時何に対しても変え難い貴重なものです。他の生徒が体育祭に精を出している中、自分達だけがグランドに立つて部活に集中できたことがまた嬉しく、優越感みたいなものを感じずにはいられませんでした。

これは勝手な持論ですが、僕等の代のチームはちょうど湘南サッカー部転換期のチームだったのではないかと思つています。それまでの数年間では珍しく、選手権出場を目指して一〇人以上が残ります。さらに湘南において清水サッカーの一代目を経験したり、これは個人的な問題かも知れませんがグランドマネージャー的な選手がチームの管理を率先するようになつたりといった具合に…とにかく、自分達の代は悔しくも選手権では決勝トーナメントの初戦で敗れてしましました

が、こうして湘南サッカー部の歴史と、そして新たな伝統において自分達のやつてきた事がしつかりと息づいているということを実感できれば光榮ですし、誇りにもなります。

こうして自分の高校時代のことをしっかりと振り返ることができるのも湘南サッカー部という自分達の基盤が今ここに存在するおかげだと思いますし、これからもずっと自分の返り着く場所であり続けるのだと思います。こうした大事な場である湘南サッカー部がいつまでも長く存在していく事を願いますし、OBでもある自分達も尽力させていただきたいと思う今日この頃です。現役サッカー部の選手も、一日一日の重みを常に意識して練習に励んで欲しいと思います。本番で自分達の実力を發揮するというのは本当に難しい事であり、究極的にはこれが日々の練習における最大の目的であると僕は考えています。やるからには徹底的に、そしてそれがいつか自信となつて生きるようになります。

これは湘南サッカー部を楽しんでください。

がんばれ！

可愛い息子たち

73回 石原 真樹

私の卒業アルバムに、ある友人が次のようなメッセージを残しました。「マネージャーという職業は、いつも見てるだけで、あとまわりの準備だけっていうつまり印象がある」(ちなみに、これはまらない印象がある)「ちなんみに、これはサッカー部員のものではないのでご安心を。」「マネージャー」は、他人から見るととても不思議なようです。水を汲んだり、試合のときにスコアをつけたり、時には玉拾いをしたり。何が面白いのか、と思うのも当然かもしれません。

可愛い息子たち!! 部員が一生懸命にがんばっている姿を一番近くで見守つていふ母。それがマネージャーであると自負しています。雨の日にぶつくさ言いながら筋トレに励んでいる姿を知つていては、怪我に苦しんでいるのを側でいつも見ていて、だからこそ、試合に勝つと心のそこから嬉しくなる。逆に負けた時は部員と同じかそれ以上に落ち込んでしまった。静岡遠征も楽しいサッカー部の思い出です。

私は、いつしか、思い出に変わりました。しかし、なぜあの時負けてしまったのか今でも納得がいきません。また、もしあそこで勝ついたらどう根拠のない期待は、いまだに捨て切れずにいます。

湘南サッカーチームの心は、経験した人にしかわからないでしょう。しかし、私たちには湘南サッカーチームのマネージャーであることに誇りを持ち、心から楽しんでいます。

話は変わって、「一番印象に残つてゐる試合」についてよく聞かれますが、やはり自分たちの引退試合、選手権の二次予選です。宿敵秦野南が丘は清水先生の愛弟子チーム。先生はさぞや複雑な気持ちだったことと思います。後半のロスターイムに相手のボールがころころと私たちのゴールに吸い込まれていったシーンは一生忘れられません。選手権出場という一年生からの夢を打ち碎かれた一瞬でした。さあ延長も頑張るぞといそそ準備を始めた矢先の出来事で、何がなんだかわからず、ただ果然とその場に立ち尽くしました。徐々に、私たちは負けてしまつた。これまでサッカーをしてきた、これで部活は終わりだ、という実感がわいてきて、涙がぽろぽろ出てきました。

入部前、湘南高校のサッカー部は、僕らの世代では特にどうといった印象はないものでした。しかし、入部し、実際に練習に出るようになると、この部活の雰囲気、目標などがおぼろげながら見えてきました。それは、勝つことを第一に考えていること、そのためにはチーム一丸となるべく練習する。今までサッカーをこれまでまじめに捉えたことは、僕にはなかったので、それは驚きとともに、とても魅力的なものでした。しかし、その後に想像を絶する厳しい練習が待つていては思ひもしませんでした……。

今、当時を思い出すとしたら、最初に浮かんでくることは、ひたすら走つたことです。走つて、走つて、走る。グランドで、山で、海で。時に、ハードル、繩跳びを駆使して。おそらく、高校三年間

先の寒い時期ではありました。マネージャーたちはこの遠征を心待ちにしていました。相手校へのお土産用「江ノ電サブレ」の買出しに始まり、洗濯物の入ったごみ袋を台車に乗せてコインランドリーに行つたり、洗濯物を部員の部屋に干して回つたり、洗濯物持ち主担当でゲームにふけつたり。私たちが一年生のときの遠征では、前任の藤塚先生の壮行会を行いました。みんなで先生のお気に入り「UMBRO」のジャージと「乾杯」の歌をプレゼントし、先生との別れを惜しことをよく覚えています。

サッカーチームの思い出

75回 友松 亮

入部前、湘南高校のサッカー部は、僕らの世代では特にどうといった印象はないものでした。しかし、入部し、実際に練習に出るようになると、この部活の雰囲気、目標などがおぼろげながら見えてきました。それは、勝つことを第一に考えていること、そのためにはチーム一丸となるべく練習する。今までサッカーをこれまでまじめに捉えたことは、僕にはなかったので、それは驚きとともに、とても魅力的なものでした。しかし、その後に想像を絶する厳しい練習が待つていては思ひもしませんでした……。

今、当時を思い出すとしたら、最初に浮かんでくることは、ひたすら走つたことです。走つて、走つて、走る。グランドで、山で、海で。時に、ハードル、繩跳びを駆使して。おそらく、高校三年間

で僕たちは、通常の人が一生に走る距離の一〇〇倍、いや、一〇〇〇倍は走ったことでしょう。何回足をつって、何回「もう、人生終わりかな」と思つたことでしょう。それほど走つたと思ひます。それでも、昔に比べると全然走つてない、と先生はおっしゃつていたので、先輩方々には頭が下がるばかりです。

さて、三年間で僕たちは数え切れないと練習、試合をしてきました。その中でも、やはり強く印象に残つていることがあります。ここでは、そのうちのいくつかを振り返つてみたいと思います。

まず、僕が高校一年生のときである、一九九七年九月一四日。選手権、二次予選の初戦の日、相手は秦野南が丘高校。このときのチームは、三年生を中心としました。誰もが全国大会を本気で目指していたと思ひます。少なくとも僕は、神奈川を制して、全国大会に行くつもりでした。そのことに少しの疑いも不安もありませんでした。サッカーをやることが本当に楽しくて、どうしようもない時期でした。味方も、敵もほとんどの人が自分よりうまく、その中で毎試合、毎試合自分の力を試していくことが、ある意味、快感でした。そして、チームはこの日も勝利に向かつて、一丸となつて戦つてゐます。しかし、結果は〇—1の負け……。自分個人を考えれば、この日のデキは良く、勝つていれば、次につながるいい試合だつたと思います。しかし、負けてしまいま

した。終了間際に取られたあの1点のことは、今でもはつきりと思い出せます。しかつた。しかし、何より悔しかつたことは、三年生たちとサッカーができなくなることだった。このメンバーでサッカーができなくなることが、何よりも嫌だつた。もっと勝てたのに、絶対に全国に行けたのに、という思いは、当分の間捨てきれませんでした。

思えば、僕の高校サッカーはここから、この日から始まつたのだと思ひます。あの時、本当に心から誓いました。絶対に、全国に行つてやると。

しかし、実際に、主将になつてチームを作り難しさは生易しいものではなく、困難の連続でした。チームを作りつつ、自分も高めていかなければならぬ。正直、毎日悩みました。チームのまとめ方、練習と試合のレベルの違い、大会前のモチベーションの上げかたなど、はつきりとした答えも出せず、過ぎていくのは時間ばかりでした。

そんな中、新人戦の地区予選が始まりました。結果は、湘南地区優勝。一二試合で失点1(FK)。がむしゃらに突き進んだ結果でした。これで少し自信を持つことができ、チームの方向性が見えてきました。そして、主題「関東大会出場」、副題「ユニフォームを変えよう」＝「短パンを長くしよう」という、明確な目的意識を持つて臨んだ関東大会予選はベス

ト4。インターハイ予選は、ベスト24。そして、最後の大会、選手権。高校サッカー生活の集大成。

一九九九年九月一九日、二次予選初戦。この日、僕はふと二年前を思い出しました。全国大会に行くと誓つたあの日、そのときから約二年。自分の、自分たちの進んできた道が試されると。私の「全国へ」の気持ちは、二年前には決して負けることのない、強いものとなっていました。しかし、結果は、二次予選初戦敗退。

「全国大会に行こう」。これがすべての始まりでした。後ろを振り返る暇もなく、サッカーに没頭し、全国大会を目指してチーム一丸となつて戦つた日々。それは何よりも自分にとって、大きな財産になっています。全国大会には出場できませんでしたが、湘南高校のサッカー部に入部し、チーム全員が一つの目標に向かつて真剣に戦つたことは、今も、これからも絶対に忘れられません。

平成年間の記録

年度	監督/主将	大 会	試 合 結 果	備 考
1989 H 1	藤塚	関 東 3回戦	湘南 0-1 向上	2次予選
	結城	総 体 6回戦	湘南 0-0 鎌倉(PK負け)	
1990 H 2	藤塚	選手権 2次1回戦	湘南 0-3 大清水	中央大会
	石井	新人戦 2回戦	湘南 0-4 荘田	
1991 H 3	藤塚	関 東 2回戦	湘南 2-5 県相模原	ベスト32
	中園	総 体 2回戦	湘南 1-3 鎌倉学園	
1992 H 4	藤塚	選手権 1回戦	湘南 0-1 川崎南	中央大会
	深沢	新人戦 2回戦	湘南 1-2 逗葉	
1993 H 5	藤塚	関 東 2次2回戦	湘南 0-1 向上	ベスト4
	熊沢	総 体 4回戦	湘南 1-3 旭	
1994 H 6	藤塚	選手権 3回戦	湘南 0-1 桐蔭	1次予選
	高垣	新人戦 地区予選負		
1995 H 7	藤塚	関 東 不出場		ベスト4
	阿見	総 体 5回戦	湘南 0-0 鎌倉(PK負け)	
1996 H 8	鈴木	選手権 2次1回戦	湘南 1-3 大清水	ベスト16
	須藤	新人戦 4回戦	湘南 0-4 藤沢西	
1997 H 9	金井	関 東 2回戦	湘南 0-2 厚木南	中央大会
	清水	総 体 3回戦	湘南 0-1 大船	
1998 H 10	須藤	選手権 3回戦	湘南 0-0 清水ヶ丘(PK負け)	中央大会
	森下	新人戦 2回戦	湘南 0-1 武相	
1999 H 11	友松	関 東 2回戦	湘南 1-1 武相(PK負け)	ベスト4
	清水	総 体 5回戦	湘南 0-0 湘南工科(PK負け)	
2000 H 12	須藤	選手権 2次1回戦	湘南 0-1 秦野南が丘	ベスト24
	岩田	新人戦 2回戦	湘南 0-0 淀野辺	
2001 H 13	村田	関 東 1回戦	湘南 0-1 川和	中央大会
	清水	総 体 2回戦	湘南 0-4 金井	
2001 H 13	岩田	選手権 2回戦	湘南 1-3 向上	中央大会
	内藤	新人戦 3回戦	湘南 0-2 金井	
2001 H 13	清水	関 東 準決勝	湘南 0-1 法政二高	ベスト16
	岩田	総 体 5回戦	湘南 1-2 光陵	
2001 H 13	内藤	選手権 2次1回戦	湘南 2-3 日大高	ベスト32
	内藤	新人戦 1回戦	湘南 0-1 港南台	
2001 H 13	清水	関 東 3回戦	湘南 0-1 座間	ベスト24
	岩田	総 体 2回戦	湘南 0-1 鎌倉	
2001 H 13	内藤	選手権 3回戦	湘南 0-1 日大高	中央大会
	内藤	新人戦 1回戦	湘南 0-0 麻溝台	
2001 H 13	清水	関 東 6回戦	湘南 0-1 桐蔭	ベスト16
	岩田	総 体 2回戦	湘南 0-1 東海大相模	
2001 H 13	内藤	選手権 2次1回戦	湘南 0-1 日大高	ベスト24
	内藤	新人戦 中央大会に出場権獲得		

※主将は春の関東大会の時点での主将を記入。卒業回では、結城が65回、内藤が77回。

超OBの記録

27回 山本修

旧制中学選抜大会(名門会)

昭和二一年第一回国民体育大会の中学校サッカー決勝戦で湘南中が神戸一中を3-2で破り優勝した。神戸一中は戦前の旧制中学のサッカー界で何回も優勝している名門中の名門あり、旧制中学最後の年度の全国大会決勝でのこの敗戦は、現役だけでなくOBにとつても大変悔しく、ショックな出来事であったとのことである。

この決勝戦から三〇年も経過した昭和五一年に、その当時の両校のOBが集まつて三菱養和会巣鴨グランドで対戦した時には、神戸一中から全日本代表だったOBのほとんど全員が、昔の仇を取ると出てきて、1-3でやられたそうである。その後、この対戦を聞き付けた東京高師付属中・府立五中・府立八中の我々も参加したいということで、昭和五九年に第一回の旧制中学選抜大会(名門会)が五チームで開催され、翌年の第二回から広島一中・広島高師付属中連合が参加して六チームとなり、平成七年の第二回まで継続された。第二回からは六チームを二ブロックに

分けて三チームの第一次リーグ戦の後、優勝決定戦という試合形式が続けられたが、勝敗にこだわり過ぎるのも良くないということから、終りの数回は各チーム二試合ずつの対戦で運営された。

当初は、昭和二一年の旧制中学最後の入学学年以上を参加資格としていたが、メンバーの高齢化に伴い第八回から参加

範囲を五五歳以上の新制高校卒業生まで拡張して開催された。これに応じて湘南OBチームには、湘南ペガサスシニアに所属して神奈川四十雀リーグなどで活躍していたメンバーが順次参加するようになつて強化され、第八回以降は常に良い戦績を挙げられるようになった。

参加資格を五五歳以上まで拡張しても、新制高校の後輩の少ない府立五中・八中などはメンバー不足から他の高校のOBを多数補充して強化を図るようになり、同一校OBだけで編成できるのは付属と湘南だけという状態になり、これでは会の趣旨に適合しなくなつたということで、

第一回交流会の湘南60-浦和60の試合では、早川純生・早川次郎・小林忠生の三兄弟が揃つて出場し、しかもそれぞれが得点を挙げる大活躍であった。この交流会の湘南の世話役は、第二回まで酒井佐弘(二二回)・山本修(二七回)が担当し、第三回からは中原弘巳(三〇回)・渡嶋九州夫(三〇回)が引き継いでいる。

F U S 3高校OB交流会

前記の旧制中学選抜大会閉幕の後、筑波大付属高OBと湘南高OBの関係者が旧制中学選抜大会と同じ趣旨により新し

い形でのOBサッカー交流の継続について相談し、浦和高OBを加えて3高校OB交流会が企画され、平成八年第一回から始まって昨年第五回が開催され、今年は第六回が予定されている。

この会では、各高校OBの五〇歳以上、六〇歳以上の二チームが参加してそれぞれ二試合の対戦で運営されている。

は第六回が予定されている。

旧制中学選抜大会(名門会) 11月23日

第五回まで 東京ガスG	第六回から 第一生命仙川G
○東京府立五中	○東京府立八中
○湘南中	○神戸一中
○東京高師付属中	○広島一中・広島高師付属中連合
○湘南中	○湘南中
● 0-1-5 神戸一中	● 0-1-1 五中
● 0-1-5 神戸一中	○ 2-1-0 広島連合
● 0-1-1 五中	● 2-1-3 八中
● 0-1-1 五中	○ 3-1-1 八中
● 0-1-1 五中	○ 3-1-1 付属中
● 0-1-1 五中	○ 2-1-0 神戸一中
● 0-1-1 五中	○ 2-1-0 八中
● 1-1-0 広島連合	● 1-1-0 神戸一中
△ 0-1-0 八中	△ 2-1-2 神戸一中

昭和63年(1988年) 第5回	昭和61年(1986年) 第3回
湘南中 ○ 1-1-0 広島連合	湘南中 ● 0-1-1 五中
湘南中 ○ 1-1-0 広島連合	湘南中 ● 0-1-1 五中
湘南中 ○ 1-1-0 広島連合	湘南中 ● 0-1-1 五中
湘南中 ○ 1-1-0 広島連合	湘南中 ● 0-1-1 五中
湘南中 ○ 1-1-0 広島連合	湘南中 ● 0-1-1 五中

湘南中	●	1-1-3	付属中
湘南中	○	3-1-2	広島連合
湘南中	○	1-1-0	付属中
湘南中	○	1-1-0	五中
湘南中	○	1-1-0	神戸一中
平成4年(1992年) 第9回			
湘南中	●	0-1-1	八中
湘南中	○	1-1-0	五中
平成5年(1993年) 第10回			
湘南中	○	3-1-1	広島連合
湘南中	●	2-1-3	神戸一中
平成6年(1994年) 第11回			
湘南中	○	1-1-0	付属中
湘南中	○	3-1-0	五中
平成7年(1995年) 第12回			
湘南中	○	2-1-1	八中
湘南高	○	5-1-1	広島連合
○ 筑波大付属高			
○ 浦和高			
○ 湘南高			
FUS 3高校OB交流会			
11月23日			
第一生命仙川G			
平成8年(1996年) 第1回			
湘南60	○	1-1-0	付属60
湘南50	△	5-1-1	浦和60
湘南50	○	0-1-0	付属50
湘南50	○	4-1-2	浦和50

湘南ペガサス・
サッカーラブ(シニア)

副会長 36回 井上 孝

神奈川県で二〇数年前に、シニアクラブのサッカー大会が発足し、数年を経てそれが、郡市四十雀リーグとなり、加盟チームの増加につれて、3部に分かれた。加盟チームの中でもメンバーが比較的多く、しかも五〇歳以上でチームを構成できるようなクラブ間で、五十雀のリーグを作つたらということになつたのが、およそ一〇年位まえになるだろうか。とはいへ、チーム数、グランド、運営など簡単に実行できるものではなく、たしか三四年はリーグの形をとることなく試行的に不規則で行なつていた。その頃、言い出した縁で、最初は専ら私が、次いで横須賀の丸尾さんがほとんど運営していった。当時はペガサスの外三四チームが辛うじて五〇歳以上でメンバーを組めた。やがて、正式に四十雀リーグと分けてリーグ戦が発足し、加盟チームも増え、現在二〇チームでという盛況にいたつてい

さらに神奈川県シニアリーグに二チーム
参加している。すなわち、リーグの3部
に五〇歳台の比較的若手(?)を、そして
五十雀リーグには全員でという構成であ
る。そもそも同リーグは四十雀リーグな
ので、他の諸チームは当然四〇歳そこそ
このメンバーもいる。1部に属するペガ
サス・ジュニアも四〇歳台が主力である。
わがペガサスはクラブ内で勝手に五〇歳
以上として3部にもエントリーしている
わけであるから、結構きついはずである
が、最下位にもならず健闘している。五
十雀リーグではさすがに老舗だけあって、
毎年優勝もしくはそれに準ずる結果を残
している。代表者の名を汚して、このと
ころあまり参加できないが、たまに出か
けると今日は二〇人以上なので、という
ような出席振りで皆さんの元気なことに
脱帽である。このリーグ戦以外にも、ペ
ガサスシニアの活動の場は多い。古河の
マスターズサッカーリーグ、FUS(筑波
大付属高・浦和高・湘南高の五〇歳以上
の定期戦)大会、その他の親善試合など
である。

辛うじて五〇歳以上でメンバーを組めただけで、正式に四十雀リーグと分けてリーグ戦が発足し、加盟チームも増え、現在一〇チームでという盛況にいたつている。

いた。この先輩の卓越した理論と実戦力は前記の記念誌に詳しいが、本当に一九七〇年代までの卒業生にとっては忘れない人である)が亡くなられたことを機に編まれた記念誌にペガサスのことを執筆された大内先輩が二〇〇一年に逝かれ、この年にまたペガサスのことを書くという因縁である。いや湘南サッカーチームにおいても確たる存在のペガサスはこの偉大な両先輩無くしては語れない。

そもそも昭和三六年に私ども三六回生が卒業したときには、関東大会準優勝という久しぶりの出来(ー)に、新卒業生を母体としてOBチームを作ったが、このときにはガングチさんがペガサスと命名してくれた。名前の由来は聞いていないと思う。それ以前にもう少し上の先輩たちの前に、ファンタムなるチームがあつたらしいが、これは文字通り正体を知らない。ただ、いずれもガングチさんの命名だと聞いて、岩渕先生はPhantom, Phoenix, PegasusとPが好きなのかなあと思った。前記の大内さんの記にあるように、昭和五三年に新OBチームの結成にあたって、洗心亭でガングチさんはやはりペガサスでいいだらうと仰つたわけである。その後はほとんど専ら大内さんの尽力で今に至っている。大内先輩はお仕事のとき以外は飲んでいるような印象であったが、その緻密さと几帳面さは本当に立派なものであつた。大内さんが無

私無欲でペガサスを支えて下さつたが故に、いまこうしてわれわれが引き継ぐことができたのである。いずれもこよなくサッカーを愛した二人の先輩のことを想うとき、ともに湘南サッカーの八〇周年を祝えないのでまことに残念である。

湘南ペガサス・ジュニア

48回 関 佳 史

ここ一〇年間ほどの湘南ペガサス・ジュニアは、四〇歳代のメンバーが三〇〜四〇名前後を在籍し、ほぼ半分くらいが湘南高校サッカー部OBである。サッカー部OBだけではチームが成立せず、OBの友人関係で参加してもらいチームをつくっている。四〇過ぎてサッカーを続けるのはいろいろな事情で大変なこともありますので、各代多くても三から四人がやっている状況である。平成三年度からは、湘南ペガサス・ジュニアができるため、五〇歳以上のメンバーは原則として、上のチームに上がるようになった。

OBが関係したチームが、三〇歳代までをカバーしていると、四〇歳代のチームも引き続き活躍になる。田部井さん(四二回)が中心となっていたアンテロープス(県リーグ)からは、延べで一〇数名の方々がペガサスに参加し、OB以外も

多数加わった。四一回から五四回でつづっていた湘南ボーグームクラブは、ほとんどが湘南OBで、一〇数名が参加している。また、渡辺さん(四一回)が結成にかかわったFC浜須賀は、茅ヶ崎市の小学校の父親による四十雀チームだが、三五歳以上が参加できるため、三〇代の湘南OBが在籍し、ここからも一〇名近くが加入した。サッカーを長くつづけていくには、三〇歳代で途切れないとシステム作りが今後の課題だろう。

さて、チームは神奈川県郡市四十雀リーグを中心に活動しているが、リーグ発足当初の昭和五九年には一六チーム、平成元年に一九チーム2部リーグ、平成八年には三〇チームで3部、平成一三年には三九チームと増えづけ、サッカーの底辺の拡大は目をみはるものがある。昭和四〇年代に大会参加校が一気に一〇〇を超えた時代とほぼ符合する事実でもある。

ペガサスは、平成一〇年までには1部リーグにおり活躍できたが、平成一二年に2部落ちし、平成一三年に1部復帰した。底辺が拡大する一方で、1部の上位チームのレベルは上がっているようだ。東芝、東邦チタニウム、山武、神奈川教員などの日本リーグ2部や関東リーグクラブのOBが増えており、二〇代、三十代で練習をやって、厳しい試合を経験した選手が多く出場している。一方、湘南のOBは大学までやればよい方で、社会人でまともにやつた者はほとんどいない。

ペガサスは、四十雀の3部リーグに加盟しているので、自分のレベルにあつたサッカーを楽しめることになるはずだ。現にジュニアにそうした希望もあるが、戦力としてまだまだ期待できるメンバーなので、引き止めてはいる。逆に五〇を超えてもまだまだ四〇代とやれる方もたくさんいると思う。どういったルールで実施できるかが解決すれば実行可能なアイデアだと考える。また、現在のペガサス・ジュニアの中にも、1部では相手が強すぎて試合が面白くないので2部の方が楽しくできよいという意見もある。

しかも、1部上位チームは各市の選抜チームになつてるので、選手層が厚く穴がないため、試合となるとなかなか勝つのが困難である。ただし、高校OBを主体とするチームでは唯一湘南だけが1部おり、1部の学校のOBチームは、岩崎中学のOBと計二チームのみである。試合には、当日きたメンバーは少しの時間でも出場してもらうことを原則としている。しかし、昇格、降格がかかってくるとなかなかそうもいかず、一年間に一~二回は勝負にこだわり、全員参加の原則を守れないこともでてきてしまった。勝負を優先するのか、楽しむことを優先するのかは、永遠に解決できることのない課題だと思う。ただ今後のひとつの考え方を示すとすれば次のようになる。ジュニア、ジュニアを単純に年齢で分けず、エンジョイ・サッカーを希望する四〇代がシニアに入れるシステムはどうだろうか。シニアは四十雀の3部リーグに加盟しているので、自分のレベルにあつたサッカーを楽しめることになるはずだ。現にジュニアにそうした希望もあるが、戦力としてまだまだ期待できるメンバーなので、引き止めてはいる。逆に五〇を超えてもまだまだ四〇代とやれる方もたくさんいると思う。どういったルールで実施できるかが解決すれば実行可能なアイデアだと考える。また、現在のペガサス・ジュニアの中にも、1部では相手が強すぎて試合が面白くないので2部の方が楽しくできよいという意見もある。

体力の低下は個人差があるのは否定できない。また、仕事が忙しくて、そうそ毎週は運動できないという事情もあるだろう。せっかく、たくさんのメンバーが集まっているのでなんとか、個々人が継続できるシステムをつくりたい。現実に、一度四〇歳になつてチームに加入しながら、体力差やケガや転勤などで、チームを離れる人も少なくない。岩渕先生は「来る者拒まず、去る者追わざ」とおつしやつたそうだが、なるべく広い範囲のOBが参加できる環境作りは心がけたいものである。

終わりになるが、平成一年頃より、浅倉さん（四五回）が、チームのIT化を進められたため、平成二三年度には、ほとんどの連絡がパソコン経由ができるようになり、幹事は大変楽になった。その上、一二年からはチームのホームページが立ち上がり、一三年からはそれがOB会のホームページに発展した。チーム内のコミュニケーションが試合以外の場で活発化している。何から何まで個人で作業をすべてやつていただき、チームメンバー一同、ほんとうに感謝している。

トトカルチョ湘南創世記

64回 瀬戸 極

第一期 チーム創設から、神奈川県リーグ参加まで 1992～1996

トトカルチョ湘南の歴史は大きく三つに分けられる。

一九九二年、前身の湘南高校サッカーチームOBチームである湘南クラブから、六三～六五回生が分離・独立する形でトトカルチョ湘南が生まれた。

各メンバーの体力と技術がもつともバランスのとれていた時期だつたこともあり、いきなり藤沢市リーグ1部で優勝を果たした。しかし、翌年、登録メンバー以外が出場していたとして一年間の出場停止を余儀なくされ、必然的にチームとしても活動停止に。一九九四年、3部リーグに復帰し、2部、1部と順調に昇格して再度の優勝を果たした。

また、その年には神奈川県郡市大会でも優勝して、ちょっと天狗になつていて……。

第一期 神奈川県リーグ参加から、県リーグ一部昇格、残留まで 1997～1999

一九九六年末、藤沢市リーグのレベル

に飽き足らず、神奈川県リーグに挑戦しようという話になり、翌一九九七年シング最初の年はプロック二位で入替戦（兼神奈川県サッカー協会会長杯）に出場し、四回戦で東邦チタニウムに敗れはしたものの2部昇格を果たす。この大会での吹雪の中での二試合は、私が現役二年の時の選手権予選対藤沢西高戦（1-0で勝利）。その後全国大会へ出場。とはいえるが既に引退してスタンドにいたが。）と共に、私のサッカー人生の中でも非常に記憶に残る試合である。今でもあの時の凍傷が治らないとボヤくメンバーも多いほどである……。

一九九八年は県2部リーグでプロック二位となり、リーグ全体の三位決定戦へ出場。逆転でFC旭に勝利し、続く1部チームとの入替戦でも港北FCになんとか勝利し念願の1部昇格を果たす。しかし、翌一九九九年、それまでとレベルの違う相手にかつてなかつたほどに敗戦の連続。一〇位でシーズンを終え、前年とは逆に2部チームと入替戦……のはずが、その年1部で優勝した東邦チタニウムが関東リーグに昇格したため、入替戦ナシでなんとか残留した。

この頃には中心メンバーの体力は下り坂にかかるおり、それを高校時代からのコンビネーション（共通意識）と頭を使つたサッカー（要領の良さ）で、ギリギリで勝ち進んだという印象が強い。

二〇〇〇年、前年の成績と、中心メンバーの高齢化（！）というチーム事情を踏まえ、チームに若い血を入れようという話になり、若手メンバーを大幅に補強する。しかし、中心メンバーの体力の衰えは隠せず、前年以上に敗戦を重ね、結局、一位でシーズンを終え自動的に2部に降格した。

第3期 神奈川県リーグ1部一年目から現在まで 2000～

二〇〇〇年、前年の成績と、中心メンバ

ーの高齢化（！）というチーム事情を踏まえ、チームに若い血を入れようという話になり、若手メンバーを大幅に補強する。しかし、中心メンバーの体力の衰えは隠せず、前年以上に敗戦を重ね、結局、一位でシーズンを終え自動的に2部に降格した。

2部降格初年度の今年の二〇〇一年は、昨年にも増して若手の補強を行い、今まで下降の一途をたどつていたチーム全体の運動量も上昇の兆しを見せてきた。さらに、善木、田中さんといったベテラン（？）も復帰し、石渡を中心とした現在のチーム状態は良好である。現在、2部Bプロック三位だが、まだ昇格圏内であるプロック二位だが、まだ昇格圏内であるプロック二位以内の可能性も残つている。残り一試合とも勝つて、なんとか望みを繋げたいところである。

こうして振り返つてみると、トトカルチョ湘南のチームとしての性格が変化しているのがわかる。第一期は、湘南高校サッカー部のOBチームとして広く新しいメンバーを受け入れていた湘南クラブから分離・独立という形で、六三～六五回生中心のチームを結成し、第2期に向けて結果が高まつていく。しかし、第3期に入つて、現状戦力で今のレベルで戦つていくことに限界を感じたこともあり、再び新たなメンバーを受け入れ、湘南高

校サッカー部全体のOBチームとしての性格を取り戻していくのである。(一方、貫してOBを広く受け入れてきた湘南クラブももちろん健在である。)

また、こうした社会人クラブの宿命として、チームの勝利を優先するか、メンバー全員が試合に参加できることを優先するか、という命題も常にについてくる。

チームとしての節目にはそういう点についても話し合われ、一応のコンセンサスを得た上でその後の活動方針を決めて来ているが、第2期以降、必ずしもメンバー全員が試合に出られないことも事実である。

自分も徐々に出番が減つて来ているが、それでもこのチームに居場所はあると感じている。トトカルチヨ湘南というチームが、自分以外のメンバーにとっても、そう感じられるようなチームであり続けてほしいと願つて止まない。

最後に、中心となつてチームの運営を担つてきた、須藤さん、中澤さん、そして影ながら応援して下さっている鈴木中先生にこの場を借りて感謝の気持ちを捧げたいと思う。

平成13年度 活動報告

60歳以上の活動

30回 中原 弘巳

ツカーハンドエイジ大会(六月)に参加しました。いずれも良好な芝生のグランド、周囲の素晴らしい環境でのサッカーを楽しみました。

毎年参加のJヴィレッジ全国シニア(六〇歳以上)大会(五月)、刈谷スープアエイジ大会(二月)に加えて、今年はダイヤモンドエイジ大会(六月)に参加しました。

ツカーハンドエイジ大会(六月)に参加しました。いずれも良好な芝生のグランド、周囲の素晴らしい環境でのサッカーを楽しめました。

*県内の試合 県内の六〇歳代チームとの交流練習試合を三回行いました。そろそろ来年度は六〇代リーグ戦の実現をしたいと思いま

す。

今後もシニア年代において、サッカー

を楽しみながら、生活を豊かにすることに役立つような活動をして行きたいと思

います。

〈試合記録〉

*全国シニアサッカー

湘南 3-1-1 函館四十雀
湘南 3-1-1 兵庫シニア

湘南 0-1-1 オール青森
湘南 5-1-2 群馬FC 60

湘南 3-1-1 千葉四十雀
湘南 3-1-1 福井

*スーパーイージサッカー

湘南 1-1-2 名古屋
湘南 0-1-4 大阪FC

*菅平ダイヤモンドエイジ

湘南 1-1-1 富山
湘南 1-1-3 名古屋

湘南 6-1-1 岐阜
湘南 1-1-0 信州

らしいものを楽しむことが出来ました。彼らは芝生の専用グラウンドで毎週一・二回のナイトゲームを、休日を使うことなく、仕事が終わってから行つており、サッカーが日常生活の中に組み込まれているようでした。日本代表チームの成長とは別に、一般レベルでのサッカー環境の違いを改めて感じました。

ツカーハンドエイジ大会(六月)に参加しました。いずれも良好な芝生のグランド、周囲の素晴らしい環境でのサッカーを楽しめました。

毎年参加のJヴィレッジ全国シニア(六〇歳以上)大会(五月)、刈谷スープアエイジ大会(二月)に加えて、今年はダイヤモンドエイジ大会(六月)に参加しました。

ツカーハンドエイジ大会(六月)に参加しました。いずれも良好な芝生のグランド、周囲の素晴らしい環境でのサッカーを楽しめました。

ツカーハンドエイジ大会(六月)に参加しました。いずれも良好な芝生のグランド、周囲の素晴らしい環境でのサッカーを楽しめました。

*オーストラリア遠征

湘南 2-15 ゴールドコースト選抜A
湘南 0-5 ゴールドコースト選抜B

ペガサスシニアの活動

33回 篠田亮

ペガサスシニア（50歳以上）は、今年も都市対抗リーグ四十雀3部・五十雀、古河市マスターズ大会、FUSサッカーリーグ（東教大付属高、浦和高、湘南高のOB交流戦）で、気持ちだけはサッカー少年に戻り大いに楽しみました。戦績は四十歳代主体の相手と対戦する四十雀リーグで四勝九負一分と善戦、主戦場五十雀で六勝一負二分、対小田原高校不覚の一敗で優勝を逃し悔やんでいます。一年連続参加の古河市大会は六〇歳代が他大会と連戦で欠場、四試合には駒不足、不本意な結果でした。FUSは本稿締め切り後だが年々増強される浦高をマーク、従来通り圧勝を期しています。

来年は日本・韓国でワールドカップ。エイジの世界大会での活躍など我々の世代には瞠目の進歩です。幼少からボールに親しんできたことの成果でしょう。現在神奈川県では四十雀リーグに三十九チーム、五十雀リーグに一〇チームが参戦し、雀1部はメキシコ五輪後のブーム時の少

ており、全国一の盛況です。これらの参加者が從来以上に少年サッカーの啓発・育成に寄与するでしょうから今後も楽しめます。（経験者の目を持つ愛好者も増えます。）
ペガサスは昭和五三年に結成しました。現OB会長柳川さんを中心に、松本好且（三七回）、大内健嗣（三二回）、牧村英樹（三〇回）氏が発起人となり、岩渕先生の御賛同と御命名を頂き、OB活動の核をも目指して出発したそうです。やっと一人の集まりから、今や四〇歳代から六〇歳代まで各々の分野で活動する一〇〇名近いクラブに発展しました。年代も幅広く湘南OB以外も加わったクラブですからまとめるのは却々難しいことです。

ここまできたのは、会員のサッカーに対する愛着もさることながら、発足以来代表者を務められた大内さんの温厚篤実なお人柄が求心力になつていました。エレベーターのロープを扱う会社を経営され、御多忙にも拘らずクラブの事務をも担つて下さいました。残念ながら今年一月一日逝去されました。ペガサスの大恩人に深甚の謝意を献げます。代表の後任は井上孝（三三回・OB副会長）です。世代中の拡がり、日本協会主催の高年者大会開設県予選経由の全国大会）、三〇歳代以下の

ペガサスジュニアの活動

49回 元松 経男

部残留がやつとのようです。シニアが所属の3部リーグでも小中学生クラブの父兄チームには勝つものの、若い新入りチームには善戦程度。多くは高校OBチームで技術、戦術ともかなりのものです。云え他チームに新鋭が増え力は拮抗しつつあります。ゲームが練習を兼ねるペガサスとしては工夫が必要です。サッカーの得点の原理は敵守備者を自ゴールに向けさせるか、ゴール前を横切る早いボルト移動に要約できる。守備の要諦も攻撃者各人の補足とスペースのマネージメントに尽きると小学生は考えております。年はとっても、岩渕さんの云われた「サードキックで全国制覇」を脳裡に、スマートなサッカーを目指したいものです。

なお、今夏大内さんの墓参の折、岩渕先生墓所（藤沢市大庭台墓園、19-3区10列9番。ご命日は昭和五五年三月四日）にお参り、ペガサスの近況を報告致しました。

結果として、1部リーグでは一試合を残して二勝七敗一引き分け。得点一二、失点二六と不満の残る数字となってしまいました。一一二チーム中一一位と1部残留が微妙なところとなつてしましました。

今後の課題は、①一試合を通して安定したチームディフェンスができる体力を付けること。②少ないチャンスを確実に結果に結びつける得点パターンをチームとして練習で身につけること。③体力負けを理由にしないよう、数少ない試合の時間を確保すべく、確実に参加できるよ

られたのを始め、昨年の準優勝に大きく貢献された数名の方が、働き盛りの証として転勤のため休部扱いとなられました。入れ替わりに、五三・五四回生の若手が五名程参加してくれるようになつたもの、これまで仕事に日曜日もなく常時参加とはなかなかいかず、安定したメンバー構成ができなかつたのが今シーズン通しての悩みでした。

対する1部リーグの過半のチームは、世代交代がうまく進み？社会人のチームで鍛えたメンバーが主力となつており、練習量も多く、リーグ戦以外の試合数も相当こなしているようで、一試合を通して安定した体力と技術を備えたチームに変身していました。

を迎えたものの、三シーズンぶりに復帰した1部リーグは以前とは比べものにならない程レベルアップしていました。
我がチームの柱としてキャプテンをさせていた浅倉さん（四五回）がシニアへ移り、OB会長としてキヤブテンをさらにしました。

湘南サッカーOB会報

うに普段の根回しと節制に励むこと??.
暗い話ばかりですが、こんなシーズン
中にも結構良い試合も多かったです。
サッカーで勝つてゲームに負けてしまつ
たり、ちょっととの差で結果に結びつかな
かつたゲームもありました。現役の時に
良くなかったゲームもあります。

六月に行われた寒川戦では国体選抜を

率いて忙しい中、藤塚君(五四回、元湘南
高校監督)がスイーパーとして参加して

くれました。ディフェンスが隙のない安
定したチームに変身すると、中盤がしつ
かりとゲームを組み立てることができる

ようになり、社会人リーグ出で若返りを

計り好調の相手に、攻め込まれながらも
効果的なカウンター攻撃で2点をも
ぎ取り、完勝しました。今シーズンのベ
ストゲームです。また、一〇月の横須賀
四十雀戦は今シーズンの優勝を決められ
た試合ではありました。いつものメン
バーで戦い、高い位置での早いプレスと
中盤での早い玉出しで、こちらのペース
に持ち込み、前半を1対1と互角以上に
戦いました。優勝チームのキャプテンに、
「何でこんなに強いチームが下の方(順
位)にいるのか」といわせた場面でした。
来年に向けて好材料としたいものです。
環境の変化についていけなかつたのが
今シーズンの素直な感想ですが、それは
それなりに楽しいサッカーも楽しむ事が
出来ました。

毎年恒例の古河マスターズにも、これ
また恒例となつたシニアチームの諸先輩

方の叱咤激励を脳裏に描きながらながら
参加しました。五月二六、二七日は久し
ぶりに人数不足に悩むことなく、ゲーム
を楽しみ、初めてのチャレンジとなつた

地元の川魚料理を満喫し、新たな古河の

人と久しぶりの中島さん(四八回)がゲ
スト参加でした。

* 第11回古河市マスターZサッカー大会戦績

5/26 湘南 2-1 茨城県庁
湘南 3-1 川口市・戸塚FC

湘南 8-1 豊島区サッカー協会

そして、今年の一一番のイベントは一〇
月の御殿場マスターZへの参加でした。

昨年は日程調整が出来ずに不参加でした
が、あの富士山の麓の青々とした天然芝
とゲームの後の温泉と地ビールが忘れら
れず、満を持しての参加となりました。

一〇月二七日、二八日の二日間は延べ二
名の参加でかなりの盛り上がりとなり
ました。二勝二分けと負け無しの結果に、
温泉とお肉屋さんの経営する地ビール飲
み放題&バイキングは格別の一時となり
ました。

今日は坂部治郎(四三回)、溝口一郎(四
回)、浅倉さんはじめシニアチームの皆
さんにもゲスト参加していただき、森正

俊君(五四回)には名古屋から駆けつけて
いただきました。

* 第4回マスターZサッカー大会御殿場カップ戦績

10/28 湘南 1-1 葛飾区壮年部
湘南 1-1 多摩クラブ

5/27 湘南 3-0 川口市・戸塚FC

湘南 8-1 豊島区サッカー協会

10/28 湘南 1-1 葛飾区壮年部
湘南 1-1 多摩クラブ

10/27 湘南 3-0 S.O.B

以上がジュニアチームの今シーズンで
したが、来年に向けて私たちは二つの目
標を持たざるを得ません。一つは、後輩
から新人を発掘し次世代へ繋げること。

そして、練習不足を解消しサッカーを樂
しむ時間を確保すべく、グランンドと対戦
相手を確保すること。

OB会のみなさんご協力を願っています。

10/28 湘南 1-1 多摩クラブ

10/27 湘南 3-0 S.O.B

以上がジュニアチームの今シーズンで
したが、来年に向けて私たちは二つの目
標を持たざるを得ません。一つは、後輩
から新人を発掘し次世代へ繋げること。

そして、練習不足を解消しサッカーを樂
しむ時間を確保すべく、グランンドと対戦
相手を確保すること。

10/28 湘南 1-1 多摩クラブ

10/27 湘南 3-0 S.O.B

以上がジュニアチームの今シーズンで
したが、来年に向けて私たちは二つの目
標を持たざるを得ません。一つは、後輩
から新人を発掘し次世代へ繋げること。

そして、練習不足を解消しサッカーを樂
しむ時間を確保すべく、グランンドと対戦
相手を確保すること。

10/28 湘南 1-1 多摩クラブ

10/27 湘南 3-0 S.O.B

以上がジュニアチームの今シーズンで
したが、来年に向けて私たちは二つの目
標を持たざるを得ません。一つは、後輩
から新人を発掘し次世代へ繋げること。

そして、練習不足を解消しサッカーを樂
しむ時間を確保すべく、グランンドと対戦
相手を確保すること。

10/28 湘南 1-1 多摩クラブ

10/27 湘南 3-0 S.O.B

以上がジュニアチームの今シーズンで
したが、来年に向けて私たちは二つの目
標を持たざるを得ません。一つは、後輩
から新人を発掘し次世代へ繋げること。

そして、練習不足を解消しサッカーを樂
しむ時間を確保すべく、グランンドと対戦
相手を確保すること。

10/28 湘南 1-1 多摩クラブ

10/27 湘南 3-0 S.O.B

以上がジュニアチームの今シーズンで
したが、来年に向けて私たちは二つの目
標を持たざるを得ません。一つは、後輩
から新人を発掘し次世代へ繋げること。

そして、練習不足を解消しサッカーを樂
しむ時間を確保すべく、グランンドと対戦
相手を確保すること。

10/28 湘南 1-1 多摩クラブ

10/27 湘南 3-0 S.O.B

以上がジュニアチームの今シーズンで
したが、来年に向けて私たちは二つの目
標を持たざるを得ません。一つは、後輩
から新人を発掘し次世代へ繋げること。

そして、練習不足を解消しサッカーを樂
しむ時間を確保すべく、グランンドと対戦
相手を確保すること。

10/28 湘南 1-1 多摩クラブ

10/27 湘南 3-0 S.O.B

以上がジュニアチームの今シーズンで
したが、来年に向けて私たちは二つの目
標を持たざるを得ません。一つは、後輩
から新人を発掘し次世代へ繋げること。

そして、練習不足を解消しサッカーを樂
しむ時間を確保すべく、グランンドと対戦
相手を確保すること。

* 県社会人選手権大会 (2月)

試合結果／1部一二位として参加し、
2部九位の若葉台SCに0-1で一
回戦敗退

* 天皇杯兼県選手権大会 (5月～7月)

一回戦・横浜国立大学に2-0で快勝
二回戦・富士通川崎に5-0で快勝
三回戦・大清水クラブに1-1
PK4-5で惜敗 (ベスト16)

トトカルチヨ湘南の活動

63回 中沢 正紀

71回 歌野 寧

湘南クラブの活動

71回 歌野 寧

先輩方のチームを引き継ぎ、私ども七
回生中心の湘南クラブ立ち上げ以来、

藤沢市リーグでの活動も早五年目を迎
えています。

3部での一年間、2部での二年間を経
て、昨年から満を持しての1部参戦。苦
戦が予想された中、チームは七二回生の
新加入メンバーの力もあり、あれよあれ
よという間に無傷の五勝二分で1部優勝。

新加入メンバーの力もあり、あれよあれ
よという間に無傷の五勝二分で1部優勝。
一年目の1部での戦いを最高の形で締め
くくることに成功しました。
今年度二年目の1部リーグは、チャン
ピオンとしての重圧を多少なりとも感じ
ながらの戦い。現在五試合を消化した段
階で、四勝一敗。残り二試合で、一敗の
三チームが首位に並ぶ混戦状態になつて

ピオンとしての重圧を多少なりとも感じ
ながらの戦い。現在五試合を消化した段
階で、四勝一敗。残り二試合で、一敗の
三チームが首位に並ぶ混戦状態になつて

います。直接対決は既に終えているため、残り二つ勝って、後は運を天に任せばばかり、という状況であります。

首位を並走している状況ですが、惜しむらくは三年間続いていたチームのリーグ無敗記録が途絶えてしまつた事でしょう。押し込まれていても踏ん張つて最後引き分けに持ち込む、というのがこのチームの特徴であつただけに、大いに悔やまれるところです。ただ、昨年味わつた優勝の美酒をもう一度、とチーム全体の士気は非常に高いところで保たれています。年明けの一月二月にそれぞれ一試合ずつ、勝つてタイトル防衛といきたいところです。

さて、今シーズンのファーレンド内の事に少し触れてみましよう。

昨年、新メンバー加入以後、それまでの守つて守つて1点をもぎ取り勝つ、というチームの特徴は、ゆつくりながらも確実に変化して来ています。昨シーズンの開幕当初と比べれば、その“色”的はかなりのものだと感じています。

その中でも最も明らかな違いは、ボール保有率です。中盤から前線にかけてに新メンバーが加わり、この一年半で周囲との呼吸も合い出し、ボールのキープ率は確実に上がっています。そうなると、自然に押し込む時間は増え、チャンスの数も増加。もちろん、最も重要な得点の数字の方も大きくなっています。以前であれば、どんな力の相手にも3点以上取ることは珍しかったのですが、今では3、

4ゴール入る試合が、劇的と言つて良いほどに増えました。

この変化は、まさに新メンバー加入の効果であり、チームに彼らが溶け込んだ何よりの証拠でしょう。チームを運営する人間としてはとても喜ばしく、また歓迎すべき変化であります。

ただ、そんな良い面の一方で、残念ながら心配な兆候も見受けられます。それ

は、以前までは我がチーム唯一の売りであつたディフェンス力の低下です。3点取ることが稀だった以前は、また同時に2点以上取られることも極めて珍しいことでした。しかし現状、2点以上取られるゲームが増えています。もちろん、短絡的にそれをディフェンス力の低下、といつてしまふのは間違いでしようが、攻めて取れなかつた時に、意外にあつさりと失点してしまうシーンは目に付き始めています。今までのベースの部分は残し、新メンバーとの更なる連携強化が当面の課題です。

来年度からは、メンバーのほとんどが社会人になります。人数の問題なども出てくるでしょうが、いままで五年間で積み上げてきたものを生かし、上手にそれらに対処できればと考えています。誌面の上になつてしまいますが、今後とも湘南クラブをよろしくお願ひいたします。

△特別寄稿△

『サッカーをやつて作家になつた人を祝う会』 (昭和46年卒OB会)の報告

46回 上野 義弘

四月のある晩、一年上の先輩で名ゴルキーバーだった山口晴夫さんから突然電話があつた。同期の湯浅健二が近著

『サッカーの監督という仕事』でミズノスポーツ大賞を受賞したので、四六年卒を中心に受賞記念パーティーをやるというのだ。

現役時代の主将はOBになると同期の連絡係兼庶務幹事という重要な職務があるのだが、主将にこの自覚が乏しいと、同期が顔を合わせる機会は極端に少なくなる。私の記憶によれば、我が同期が顔を合わせたのは、以下の三回ぐらいだと思う。

①私の結婚披露OB会(これは中さんの発案で誰かが幹事をしてくれた)
②一〇年前程に母校後輩が全国大会に出場した時の壮行会
③五年程前の中さんの定年退職謝恩会

当時は、夏のインターハイ予選が終わると三年生は引退するのが慣わしあつた。そんな中で、晴夫さんは中野謙司さんとともに、二年生チームに参加し、正月の全国大会を目指したチームメートで

もある。惜しくも、元祖プロサッカー選手奥寺率いる相工大(現湘南工科大付属高校に敗れ、伝説のゴールキーパーにはなれなかつたが、元来、人に命令するのが好きなタイプ、全員を招集せよとのお達しであつた)。

因に、中野謙司さんは、もし二〇年後

に生まれていたら、今頃はJリーグで活躍していたのではないか。タイプで云えばマラドーナ。少し、誉めすぎたか。しかし、奥寺より上手いと思つていては多いと思う。

*

*

*

*

*

もう随分と前から、この手の連絡はメールでワンプッシュの時代になつてゐるが、未だに音声アラログ通信しか利用できない私は、即席連絡網を構築して全員に通知することとした。瞬時とはいかなが、代わりに懐かしい声が次々に聞こえてくる。人間の五感のなかでも、聴覚の記憶力は相当優秀だと思う。三〇年前のグランド(今はピッチと云うらしい)と同じ声だ。

連絡先のわからなかつた隅山研二、城向和子(旧姓上田)の御両人にはこの場を借りて、お詫び申し上げる。城向和子の連絡先はその後の調査で判明したが、隅山研二は沼津あたりにいるという情報しかない。消息を御存知の方が居られたら御一報願いたい。同期は皆が君に会いたいと云つてゐます。

湯浅健二の大賞記念のOB会は、中さ

ん、OB会世話役の相羽さん、同令夫人、作家先輩格の植松二郎さん（四回）の参加を得て、五月一〇日夕方横浜崎陽軒で「オウ、変わってないなあ」などの声が聞こえるなかで、おずおずと始まった。周りの人から見れば七〇歳前のじいさんを囲んで五〇歳ぐらいのおつさん達がわいわいやっているパーティーなのだが、参加者は一斉に体内時計を三〇年ぐらい（約8万時間、約3億秒!!）前に戻しており、現役諸君と同じノリで幾つかの試合について批評、解説、責任のなすりつけを繰り返したのであった。三〇年前と違うのは、敗戦への真摯な反省と明日のゲームへの戦略的議論に欠けるところか。記憶の曖昧さを良いことに「まあ一杯」、「オッ、どうも」と話が一段落していった。

* * * *

同期のメンバーを紹介しておきます。間後に復帰。現役中、CFからGKまですべてのポジションをやつた後、最終的にベンチのレギュラーとなる。プレーヤーとしての資質に自ら見切りをつけ、大学卒業後単身ドイツに渡り、プロコーチライセンスを取得。その後の活躍は皆さんが周知のとおり。泣きたくなるような苦労話はたくさんあると思うが、見えつ張りのため「俺はやつてきたのだ」という話しかしない。三十代では生意気だが、五〇に近づく年になると清々しくもある。代わりに苦労話の一つを。大学二、四

年頃、當時滋賀県草津市に転居していだ我が家にちょっと大型トラックが横付けされ、運転手は暫時休憩の後出發して行く。数百万円のドイツへの留学費用をトラックの陸送で稼いだ若き日のエピソード、スポーツ大賞もその第一歩は地味です。

* * * *

紙面も尽きたため、今回はその他のメンバーの紹介は名前のみとします。出席者から、上野義弘、山口康隆、岸本喜久雄、中山亮、石井邦和、露木陽介、森秀樹、松本隆平。欠席者は、相馬保夫、鈴木秀二郎、溝口二朗、加藤正博、神原和久、城向和子、隅山研一。次回は全員でOB会をやりたいと考えています。「湘南サッカー万歳!!」の心境で綴りました。

（この会は、四回卒植松二郎さんのOB会をやりたいと考えています。）

【人々の走路】日本放送出版刊の出版記念も兼ねて開催されました。

現役報告

牛山 旬平

湘南高校サッカー部主将

現在、僕達湘南高校サッカー部は、広大な理解、そしてOBの方々に支えられ、毎日思う存分大好きなサッカーができ、楽しい日々を送っている。新チームは一

年生一七人、二年生一七人、マネージャー四人の計三八人で活動している。一年生はとても真面目で、グランド整備をしていても魅力的だ。今後も、それぞれ自分のスタイルを大事にしてほしい。

今年は二年生の出越君がグランドマネージャーとしてチームを引っ張ってくれている。彼は身近な立場から、僕達のプレーに適切なアドバイスをくれるので、みんなからの信頼も厚い。マネージャーもまた、僕達が本当に感謝しなくてはいけない存在である。僕達がサッカーだけに集中できるのはマネージャーの支えがあるからだ。水を運んでくれたり、ジャージをたたんでくれたり、他にも多くの事を嫌な顔せずに本当に頑張ってくれて、僕達選手はとても感謝するべきだと思う。

このような恵まれた環境でサッカーができる事を本当に嬉しく思う。さらに僕達には清水先生と岩田先生という二人の良き指導者がいる。先生方の力は偉大でとても信頼されている。先生方の持ついるものを全て吸収できるよう努力し、一つ一つのトレーニングをマスターして、次のステップへ進んでいきたい。そして

最後にいつも陰で僕達を支えてくれている、OBの皆様方、そして父母の皆様に心からの感謝を申し上げたい。そしてこれからもよろしくお願ひします。もし時間がありましたら、ぜひ試合の方へ応援に来ていただきたいです。OBの皆様や父母の皆様の応援は、僕達の力となり、相手チームにとっては脅威となるでしょう。僕はチームメイトのみんなを信じています。必ず強いチームになると信じています。皆様の期待を胸に僕達自身の夢でもある全国大会優勝を目指して頑張っていきたいです。

〈平成13年度 公式戦試合結果〉

* 新人戦 中央大会

一回戦 湘南 0-1-0 麻溝台

ベスト64

* 関東大会

一回戦 湘南 2-1 城北工業

ベスト32

* 高校総体

一回戦 湘南 3-1 新栄

ベスト16

二回戦 湘南 4-0 サレジオ

ベスト8

三回戦 湘南 1-0 新城

ベスト4

四回戦 湘南 2-0 富岡

ベスト2

五回戦 湘南 0-1-1 桐蔭学園

ベスト16

* 高校選手権

一回戦 湘南 1-0 岸根

ベスト8

二回戦 湘南 1-0 茅ヶ崎西浜

ベスト4

三回戦 湘南 1-0 松陽

ベスト2

四回戦 湘南 0-1 日大高校

ベスト16

湘南サッカー部 創立80周年記念 蹴球祭・総会のご案内

2002. 1月13日(日)

於)湘南高校

(内容) ①小田原高校OBとの記念試合
②記念総会、OB懇親会

〈当日の予定〉

10:00~11:20 (35分ハーフ)	大学生(湘南クラブ)
11:20~12:20 (25分ハーフ)	40歳代
12:20~12:30	両校OB代表挨拶
12:30~13:30 (15分×3本)	50歳・60歳以上
13:30~14:50 (35分ハーフ)	一般(湘南トカルチヨ)
15:30~16:00	80周年記念総会(多目的ホール)
16:10~17:00	OB懇親会(清明会館1階食堂)

- * 雨天の際は体育館にてフットサルができます。室内用のシューズをご持参ください。
- * 清明会館は終日使用できます。着替え、食事、懇談などに利用してください。
- * 日曜は通常制の登校日です。グラウンドほか指定場所以外は使用できません。また、グラウンドでの飲酒は、ご遠慮ください。
- * 現役は新人戦の初日に当たるため、総会のみに出席の予定。

〈14年度会費納入の件〉

13年度は皆様の御協力ありがとうございました。本年もよろしくお願いいたします。社会人の方は、できましたら2口以上の寄付をお願いいたします。

・社会人 1口	5,000円
・学生 1口	3,000円

蹴球祭当日、受け付けを致しますが、御欠席の方は同封の用紙にてお振込み下さるようお願いいたします。なお、下記銀行口座も受け付けていますのでご利用下さい。

横浜銀行 本店 普通預金 口座番号 019166
湘南高校サッカー部OB会 武藤俊一 ☎0466-34-9329

〈平成13年度会計報告〉

〈 収 入 〉	
会費・寄付	1,710,000
繰り越し	46,500
利子	172
計	1,756,672
〈 支 出 〉	
現役寄付	500,000
ユニフォーム寄付	274,260
蹴球祭	115,221
遠征補助(OB)	150,000
筑波大付属戦補助	30,000
夏合宿補助(OB)	30,000
送信・事務費	365,400
印刷費	189,000
慶弔費	45,750
会議費	8,093
繰り越し	48,948
計	1,756,672

〈平成14年度湘南サッカーOB会予算案〉

〈 収入見込み 〉	
170名(社会人160名、学生10名)	
100×10,000+60×5,000+10×3,000=1,330,000	
繰り越し金	48,948
計	1,378,948
〈 支 出 〉	
現役寄付	500,000
遠征補助	150,000
印刷費	240,000
送信・事務費	210,000
蹴球祭・夏合宿	220,000
付属定期戦補助	30,000
予備費	28,948
計	1,378,948

#事務局からのお知らせ

- * 13年度は周年、80周年記念事業の呼びかけを行った結果、約200名の皆様に会費を納入していただきました。ご協力ありがとうございました。なお、名簿につきましては、会費を納入していただいた方のみに配布させていただきます。11月末日で事務手続きを締めています。それ以降に振り込まれた方や、間違って名簿のいっていない方は、お手数ですが、事務局までご一報ください。
- * 今回まとめました「湘南サッカー部小史」と「OB会活動の概要」は、今後の新入生に配布し、湘南サッカー部の歴史とOB会活動について理解を深めてもう様に致します。また、名簿上の不備はお詫びすると共に、訂正等のご連絡は武藤までよろしくお願ひいたします。
- * なお、会報のうち「平成年間の湘南クラブの活動」は、実際に4~5年の在籍期間チームで、過去をさかのぼって取材することが困難なため、割愛しました。毎年の活動状況は、会報のバックナンバーを参照してください。

2002年度各チームの連絡先

湘南ベガサス・シニア	井上 孝(36回) ☎0463-61-4234	湘南ベガサス・ジュニア	関 佳史(48回) ☎0467-45-6644
湘南トカルチヨ	中澤 正紀(63回) ☎0467-54-5493	湘南クラブ	歌野 審(71回) ☎0466-83-0774

【ホームページアドレス】

神奈川県サッカー協会 <http://www.kanagawa-fa.gr.jp/>
湘南サッカー部 <http://www.boreas.dti.ne.jp/~yasuasa/>
湯浅健二 <http://www.axisinc.co.jp/yiasa.html>

【メールアドレス】

鈴木 中先生 fwng6921@mb.infoweb.ne.jp
武藤 俊一(事務局) m9329@cityfujisawa.ne.jp
関 佳史(事務局) seki@fancy.ocn.ne.jp

※HPアドレス掲載をご希望の方は、お申し付けください。次回より掲載いたします。

湘南サッカーオーOB会会費13年度納入者

3 中村 正義	36 田中 道夫	49 元松 経男	64 木村 義幸
9 富岡 淳	37 牧村 英樹	49 小原沢 俊之	64 門野 圭司
9 松岡 五六	38 香川 彰男	49 白井 隆	64 永井 潤一
13 小熊 幸雄	39 山宮 通弘	50 六角 幸司	64 善木 茂雄
17 河西 克郎	39 小杉 淳孝	50 貴志 直文	65 吉田 稔
17 海老原 謙	39 小泉 親昂	50 川口 正人	65 小林 尚朗
17 小野 嘉	39 鈴木 俊邦	50 沢田 ミツル	66 渡辺 水樹
17 菅原 留意	41 伊通 元康	51 大木 孝	67 宇尾 朋之
18 川口 雅美	41 佐藤 良	51 五代 厚司	67 曾我部 宣
18 松本 良二	41 庄司 邦昭	51 向井 猛	68 沖山 雅志
19 池田 宗吉	41 植松 二郎	51 高橋 正純	69 石渡 弥
19 鷹野 樹雄	41 杉本 幸平	51 石郷岡 善則	71 斎藤 登基郎
20 広瀬 洋一	41 相羽 克治	51 大隈 一男	71 田中 浩司
20 小林 登	41 中里 哲郎	51 平出 稔	72 小荒井 孝典
21 藤田 貞美	41 渡辺 象次	52 八木 啓太	73 久米 悠太
21 大石 坦	41 福井 民雄	52 山田 義知	74 石渡 豊正
22 松岡 巍	41 福島 博	52 志水 利彰	74 武田 大介
22 矢住 直亮	41 二木 修二	52 菅野 正二郎	75 松本 洋一
22 桑田 孝	42 湯浅 誠治	52 田中 聰	76 杉田 豪司
23 原田 徳夫	42 関口 真	53 新倉 博史	76 藤巻 由太
23 小林 忠生	42 広野 三夫	53 武藤 俊一	76 星 悠哉
24 小田島 三之助	42 田部井 徹	53 木島 玲子	
24 下 文博	42 和田 正則	54 藤塚 久雄	2001.12.1
25 川島 元信	43 富田 喜洋	54 鈴木 信行	
26 酒井 佐弘	43 猿渡 光洋	54 篠塚 毅	
26 鈴木 美暢	43 福西 紀夫	54 森 正俊	
27 海老原 俊	43 加納 正道	54 中村 昭	
27 栗原 克夫	44 栄 卓	55 中村 道男	
27 山本 修	44 本城 勇介	55 藤原 新	
27 木原 恵	44 桑本 卓	55 鈴木 英一	
27 柳川 明信	44 小杉 勝美	56 水上 雅樹	
28 末永 直	44 分田 真	56 川島 淳	
29 本郷 美宏	45 横山 雅行	56 水戸 将史	
29 塩川 儒広	45 浅倉 泰	57 河野 光治	
29 桐沢 彰	45 中野 謙司	57 小泉 麻己人	
30 松本 好且	46 岸本 喜久雄	58 菊池 康	
30 中原 弘巳	46 山口 廉隆	58 石川 敏男	
30 渡嶋 九洲夫	46 上野 義弘	58 石渡 聰	
31 大内 健嗣	46 石井 邦和	59 高橋 誠一郎	
31 田中 啓元	46 中山 亮	59 神崎 章	
32 関根 和衛	46 露木 陽介	59 大沼 寧	
32 牛尾 慶邦	46 榎原 和久	61 神田 菊文	
32 山本 豊	46 松元 隆平	61 坂神 豪	
33 福井 久雄	46 城向 和子	62 田中 敦	
33 篠田 亮	46 森 秀樹	63 中澤 正紀	
34 早野 勝徳	46 鈴木 秀二郎	63 松田 貴志	
34 畠山 昭彦	47 加藤 浩平	64 白井 英彦	
34 番場 定孝	47 佐藤 徹	64 羽尻 慎	
34 丸屋 充	48 吉田 弘	64 羽田 伸一	
36 兼子 盾夫	48 細川 周平	64 及川 豪之	
36 植田 興義	48 青木 猛	64 劍持 隆雄	
36 井上 孝	48 川口 秀実	64 若木 均	
36 久森 茂男	48 中嶋 修	64 小林 卓麻	
36 原田 冬樹	48 関 佳史	64 濱戸 極	
36 渋谷 繁夫	49 安保 和俊	64 田村 直也	
36 関 紀夫	49 久野 浩之	64 平田 隆大	

O B 会 役 員

(会長) 柳川 明信 (27回)

(副会長) 井上 孝 (36回)

小泉 親昂 (38回)

(事務局長) 相羽 克治 (41回)

(会計) 武藤 俊一 (53回)

14年度もよろしく
お願い申し上げます。